# 源氏物語「本文と享受」の研究（Ⅲ）

## 玉鬘の巻疏注

## ――「おもしろき所〳〵」「ふる人」用語考――

岩下光雄

一、「おもしろき所〳〵」用語考
二、「ふる人」用語考
三、結語
付記

## 一、「おもしろき所〳〵」用語考

岩波「新大系」第二巻玉鬘の巻の冒頭に近い部分を引用する。まず本文。読み仮名を付さない。

[一]おもしろき所〳〵を見つゝ、[二]心わかうおはせし物を、かゝる道をも見せたてまつる物にもがな、おはせましかばわれらは下らざらまし、と京の方を思やらるるに、[三]返る波もうらやましく心ぼそきに、[四]舟子どもの荒〳〵しき声にて、「[五]うらがなしくもとをく来にけるかな」とうたふを聞くままに、[六]一人さし向かひて泣きけり。

[七]舟人もたれを恋ふとか大島のうらがなしげに声の聞こゆる

[八]来しかたも行くゑも知らぬ沖に出でてあはれいづくに君を恋ふらん

[九]鄙の別れに、をのがじし心をやりて言ひける。

[一〇]金の岬過ぎて、「[一一]われは忘れず」など、世とともの言種になりて、[一二]かしこに到り着きては、まいて遥かなるほどを思ひやりて、恋ひ泣きて、この君をかしづきものにて明かし暮らす。（334頁）

次に同書の脚注を引用する。

一瀬戸内の興味深い風景をさす。二次行「下らざらまし」まで、乳母の娘たちの心内。（夕顔は）気がお若かったので、こうした道中（の景色）をもお見せ申したかった、（しかし）もしご存命だったら、自分たちも下向することもあるまいに。三「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる波かな」（伊勢七段）による。四「舟子」は水夫、船を操る者。五当時の舟歌か。前の引歌とともに、旅路にあって望郷と懐旧の念を強める趣である。六乳母の娘は二人。次の歌もその二人の詠作。七船人も誰を恋しく思っているというのか、大島の浦を過ぎつつ心悲しげに舟歌の声が聞こえる、の意。「大島」は筑前国宗像郡（現福岡県）の大島、三行後の「金の岬」の沖にある。「浦」「心（うら）」の掛詞。夕顔を恋しく追慕する気持ちをこめた歌。八来た方角も行く方角もわからぬ沖に漕ぎ出して来て、ああどこに向かってあなたを恋い求めるというのだろう、の意。これも夕顔追慕の歌。九都と別れ、鄙への旅路で。「思ひきや鄙の別れに衰へて海人の縄たき漁せむとは」（古今集・雑下・小野篁）による。

10宗像郡玄海町鐘崎の岬。沖の大島との間を航行。航海上、難所であった。

二夕顔のことを。「世とともの言種」は日常の口癖。「ちはやぶる金の岬を過ぎぬとも我は忘れじ志賀の皇神」（万葉集七・一二三〇）による。

従来、一般的にはこういう類の注釈がつけられてきた。そして、この部分には、一見、さして問題はないように思われてもきた。ただ、小山利彦氏（『影印校注古典叢書・玉鬘・初音』新典社　昭61年5月15日初版）だけは、

「道すがらの海上のさまなり」（岷江入楚）。歌枕と呼ばれる名所など。（18頁）

と注記する。筆者も、『首書源氏物語　玉鬘』（影印本　和泉書院　初版第三刷　一九九四年四月二五日）補注で次のように注記した。初版の補注も同じ。

8（3）「おもしろき所々」諸注「景色のよい」の類。ただ新典社『影印校注』（小山）は、「歌枕と呼ばれる名所など」とする。和歌の唱和へと展開する旅の文学のなかに、単なる自然の景色だけを重ねるのはどうか。『評釈』が「古歌をかりてかたづけた」とするのも如何か。（112頁）

この前後の本文や、玉鬘の巻の冒頭、末尾の本文をどう読むかは、疏注の領域にとどまらずに、「源氏読み」として、かなり重要な意味、問題をもつもののように思われる。従来、これらの点については、あまり考えられてこなかった。『伊勢』八十二段、『土佐日記』、『源氏』若紫の巻の「にしのくにのおもしろき浦うら」などに関わる、対応する歌枕の用語意識に注意して、読んでいくと、今まで読み解かれてこなかった、種々の問題が、クローズアップされてくるように思う。

「おもしろし」の辞書的な意味は、従来どのように考えられ、分類されてきたか、恣意的ではあるが、手もとにあるものを、比較分類して一覧にまとめると、およそ、次のごとくである。

| 小学館 国語大辞典 | 角川書店 古語大辞典 | 岩波書店 広辞苑第四版 |
| --- | --- | --- |
| ①見て楽しい。愉快だ。気持ちがいい。<br>②興味がある。興味深い。<br>③趣がある。風流である。風情（ふぜい）がある。<br>④望ましい状態である。思うとおりである。<br>⑤こっけいである。おかしい。一風変わっている。 | ①外界の状況から心楽しい気持ちになるさま。愉快だ。<br>②心ひかれるところがあるさま。趣があるさま。<br>③他と一風変わっていて、それが関心をひくさま。興味をそそる点を持っているさま。<br>④常識と外れていて滑稽である。 | ①気持ちが晴れるようだ。愉快である。楽しい。<br>②心をひかれるさまである。興味がある。また趣向がこらされている。<br>③一風変わっている。滑稽だ。おかしい。<br>④思うとおりで好ましい。（主に打消の語を伴って使われる）。 |

『国語大辞典』の「③」、その他の辞典では「②」の意味が当てられ、解されてきた。だが、その事自体に誤りがあった、というわけではない。それだけではない、個有の用語意識が存在し、それがはたらいていた、という事実に注意しなければならない。折口信夫博士は、日本文学の発生とその発想の基層のなかに、常に「民俗信仰」を見ようとされた。現代の「話型」研究の、一つの源流を成していた。だが、「折口語彙」が、折口「用語」の言い換えであるというように考えているとすれば、やはり、それは誤りである、と思う。折口学が、国語学の語誌（史）的研究を深く取り込んでいたことの意味は、もっと正面に据え、捉え直さなければならない。そういう視座から「折口語彙」は考えるべきものである。折口学に、語史に迫る気迫のようなものを感じ、おそれるのは、門外漢のおおけない気負いのようなものがも

知れぬ。

『源氏』の作者が見た『伊勢』や『業平集』が、如何なる形態、組織を持つものであったかについては、不明な点も多い。複雑な伝来諸本の問題も存するが、新編『全集本』（学習院大学蔵三条西家旧蔵伝定家筆『伊勢物語』を底本）「八十二　渚の院」の前半部を引用する。読み仮名は付さない。

むかし、惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花さかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩りはねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜、ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。また人の歌

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき

とて、その木のもとは立ちてかへるに日暮れになりぬ。（185頁）

頭注に、「『古今集』春上・業平、詞書「渚の院にて桜を見てよめる」。『古今和歌六帖』第六（桜）・業平、第三句「さかざらば」。」（以下省略）（184頁）とある。「交野の渚の院」は歌枕であった。だが、岩波『新大系　八代集総索引』の「地名索引」によれば、歌にも詞書、左注にも、「渚の院」とあるのはこの歌だけで、歌枕として他には見えない。ただ、「交野」「水無瀬川」を歌枕として詠んだ歌は多い。『総索引』の記号等を、そのまま付して示すと、次のごとくである。記号については、同書「地名索引」の凡例を参照。

交野

古今　(1)462〈462〉・後撰　(2)917・
金葉　(3)283、(4)502・詞花　(5)152・
新古　(6)114、(7)539、(8)685、(9)686、(10)688、(11)111・

「交野」の用例は、右の十一例である。

(1)は、巻第十「物名」歌。詞書「交野」。「夏草のうへは繁れるぬま水のゆく方のなきわが心哉」。

(2)は、巻第十三「恋五」の歌。詞書「えがとう侍ける女の、家の前よりまかりけるを見て、「いづこへ行くぞ」と言ひ出だして侍りければ」。「逢事の交野へとてぞ我はゆく身を同じ名に思ひなしつゝ」。脚注に河内の歌枕「交野」「狩り場として有名」とある。今の枚方市の辺り。

(3)は、巻第四「冬部」の歌。詞書は282番歌と同じ「鷹狩りの心をよめる」。「ことは（わ）りや交野の小野に鳴くきゞすさこそは狩の人はつらけれ」。

(4)は、巻第八「恋部下」の歌。「題読人不知」。「逢ふ事のかたのに今はなりぬれば思ふがりのみ行くにやあるらん。」

(5)は、巻第四「冬」の歌。詞書「鷹狩りをよめる」。「あられふる交野の御野の狩ころもぬれぬ宿かす人しなければ」。脚注に「一年にひとたび来ます君待てば」（伊勢物語八十二段）の歌に拠ることを注記。

(6)は、巻第二「春歌下」の歌。詞書「攝政太政大臣家に五十首歌よみ侍けるに」。「またや見ん交野のみ野の桜がり花の雪ちる春のあけぼの」。脚注に「以下一一八まで山里の落花。」と注記。

(7)は、巻第五「秋歌下」の歌。詞書「法性寺入道前関白太政大臣家歌合に」。「うづらなく交野にたてる櫨（はじ）もみぢ散りぬばかりに秋風ぞ吹く」。脚注に「交野」は「河内国の歌枕」とある。

(8)は、巻第六「冬歌」の歌。詞書「百首歌めしける時」。「みかりする交野の御野にふる霰あなかままだき鳥もこそたて」。

(9)は、(8)と同じ歌。詞書「内大臣に侍ける時、家歌合に」。「みかりすと鳥立ちの原をあさりつゝ交野の野辺にけふも暮らしつ」。

(10)も、(8)と同じ歌。詞書「鷹狩りの心をよみ侍ける」。「かりくらし交野のましばお（を）りしきて淀の河瀬の月をみるかな」。脚注に「参考「かりくらしたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり」（古今・羇旅、在原業平。伊勢物語八十二段）。」と注記する。

(11)は、巻第十二「恋歌二」の歌。詞書「百首歌たてまつりし時」。「あふことは交野の里のさゝの庵しのに露ちるよはの床かな」。脚注に「参考」歌として資料(2)『後撰』の藤原爲世の歌を注記。

以上の資料からも明かのように、歌枕「交野」を詠んだ歌は、資料(6)(10)歌を除くと、比較的みたされない想い、寂しい心情を詠出した歌が多い。それは、『伊勢』の世界が、一見、はなやかな、みやびの世界を見せながら、実はその奥に無限の哀愁と哀調とをただよわせているのに照応する。それは、「わび」の世界でもあった。『伊勢』は、「その院の桜、ことにおもしろし」といいながら、それを逆説的に、アイロニカルに裏返し、惟喬親王身辺の政治的暗雲、切迫した時の流れを語っている。それは、『伊勢』を貫くかと見られる「反藤氏」の精神と文学との挫折をも意味する。「みやび」の奥にひそむバラドックスとアイロニーの批評の精神こそ、「ことにおもしろし」という美意識であったように思う。それにしても「渚の院」は、「交野」という歌枕の世界から消えていく。『伊勢』の世界を揺曳したわずかの歌のなかだけに、その基層となって、細々と残存しているに過ぎない。「資料」(1)の「世の中に」の歌が、第三句が「さかざらば」となって、『古今和歌六帖』第六「さくら」の歌に重出していることは、やはり、注意しなければならない。『古今和歌六帖』には、「花さくら」「山さくら」などに類別されているものを除き、「さくら」の歌は四一六九番歌から四

二一五番歌までの四十六首の「さくら」の歌がある。ところが四一七一番歌に「これより十五首つらゆき」とあり、紀貫之の歌は十六首、34.8%にも達する。しかも、その最後の歌四一八五番歌には、次のような歌がある。

さくらには心のみこそくるしけれあきてちらせるはるしなければ

業平の「世の中に」の歌は四二一三番歌。貫之のこの歌は業平の四二一三番歌を意識して作られた、あるいは、『伊勢』八十二段の享受に関わって作られた、と見るのは牽強付会の説だと言われようか。このことについては、別に述べる。だが、『土佐日記』には、次のように見えている。仮名遣いなどは原文のままであるが、読み仮名などは省略した。

かくて、船曳き上るに、渚の院といふ所を見つゝ行く。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。後方なる岡には、松の木どもあり、中の庭には、梅の花咲けり。こゝに、人〳〵の言はく、「これ、昔、名高く聞こへたる所なり。故惟喬の親王の御供に故在原業平の中将の、

世の中に絶へて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし

といふ歌詠みたる所なりけり。今、今日ある人、所に似たる歌詠めり。（岩波『新大系』29頁）

『新大系』の校注者長谷川政春氏は、「咲かざらば」を「当意即妙の改変」と注記するが、萩谷朴氏（角川『全注釈』）も同じ。指摘されているように『古今和歌六帖』『伊勢』伝本の本文上の問題もあって、『土佐』の改変とは、にわかに論断し難いようにも思われる。如何なものであろうか。「おもしろかりける所」について、岩波『新大系』、『旧大系』、『新潮古典集成』にはともに注記はない。小学館『全集』も同じであるが、現代語訳に、

その院は、昔をしのびながらながめると、いかにも趣の深い所である。（『全集　土佐日記　蜻蛉日記』62頁）

とある。この現代語訳は、『源氏』玉鬘の巻の「おもしろき所〳〵」についての従来の諸注と全く変わらない。だが、そういう文学作品の享受の方法は、やはり、誤りだと思う。

「昔を思ひやりて」、「昔、名高く聞こへたる所」とは言っても「故惟喬の親王」、「故在原業平」というなかには、時の流れ、その時代の隔てを超えて、歴史的現実に生きようとする歌人貫之の回想の念が奥深く秘められてもいた。だから「今、今日ある人、所に似たる歌詠めり。」と表現している。『古今和歌六帖』四一八五番歌の「桜には」の歌は、『新潮古典集成　土佐日記　貫之集』（木村正中校注）に、『貫之集』の歌番号で796の歌、「興風が歌の返し」と詞書に見える。

木村正中氏は、

『興風集』に「見てかへる心あかねば桜花咲けるあたりは宿やからまし」という一首がある。あるいは貫之が返歌したもとの興風の歌に該当するかも知れない。（276頁）

と指摘されている。「宿やからまし」に『伊勢』八十二段後半部の物語にある「狩りくらしたなばたつめに宿からむ」「宿かす人もあらじとぞ思ふ」の贈答歌を引く、それに依拠し、それを意識に置いての物語享受の一面を持っていたことは、ほぼ間違いないであろう。そして、そのように考えることが出来るとすれば、『土佐』の記述は、従来の見方のほかに、また新しい意味が存在していたことを考えなければならないように思う。貫之が惟喬の親王と業平の物語を、歴史的現実の場に捉え直そうとする意識のなかに、『伊勢』を貫く作品の理念として存在した反藤氏の思想が存在していたように思われる。貫之の社会批評、政治批判、その戯画化とアイロニカルなまなざしのなかには、そういう反俗の精神が愁い輝いていた。それは、『伊勢』八十二段の文学的世界、「みやび」の世界の背骨として、したたかに存在するものだったと考える。

「昔を思ひやりて見れば」というのは、『全集』の現代語訳にとどまらず、そういう意識のなかで捉え直された「歌枕」への想いがこめられていた。「おもしろき所」は、歌枕として、『伊勢』八十二段の歌物語とを重ね、それを借景に現実の風景を観照していた。ただ、「眺め」ていたのではなかった。『伊勢』八十二段の「その院の桜、ことにおもしろし」

には、桜の名所としての歌枕、貫之を「桜の花」の歌人として伝承されていく基層が、既に用意されていた。『古今和歌六帖』の時代に至って、ようやく遅れて開花していく伝承的契機が、やはりそこに既に存在していたのである。「今、今日ある人、所に似たる歌詠めり。」という最後の一節に見える「所」の語は、「歌枕」に他ならない。このように論理の筋をたどり、考えることによって歌が作られていった必然性を精確に理解することが出来る。「渚の院」は、単なる自然の「風物」ではなかったのである。『源氏』の作者は、『伊勢』八十二段から『土佐』へと続く日本文学の構成のありよう――「旅の文学」が「歌枕」をめぐって展開していくという日本文学の型、構造を、明確に読み解いていた、すぐれた「文学史家」でもあった。

単なる「自然の風物」ではなく、和歌の世界、文学の世界を通して、それを借景として、自然の風物を「眺め」「観照する」という、歌枕に対する方法は、また、新しい「歌枕」をつくり出す、歌枕のもつ新たな美を創造し、つけ加えていく、という営みをもともなっていた。貫之の『土佐』に見える歌詠む営みもそうであった。若紫の巻に、

後の山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞わたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば、「これはいと浅くはべり。外の国などにはべる海山のありさまなどを御覧ぜさせてはべらば、いかに御絵いみじうまさらせたまはむ」「富士の山、なにがしの嶽」など語りきこゆるもあり。また西国のおもしろき浦々、磯のうへを言ひつづくるもありて、よろづに紛らはしきこゆ。

「近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。何のいたり深き隈はなけれど、ただ海のおもてをみわたしたるほどなん、あやしく他所に似ず、ゆほびかなる所にはべる。(『全集』(1) 276頁)

とある。春の北山から眺望される春霞にけぶる京都の風景、それは絵によく似ているという。話は、「ひとの国」へ

と及び東国の山々、西国の浦々と、やはり歌枕をめぐって語られていく。「おもしろき浦々」も、『全集』は「風情ある浦々」と現代語訳。岩波『新大系』の脚注も、「浦という浦や石浜のほとり。海の実例としては西国の風景が挙げられる。」（一　154頁）と注記する。従来の解釈として、定説化してきた、こういう考え方に、やはりにわかに従うことは出来ないように思う。風情や趣のある浦という浦、磯という磯という自然そのものの風景、風物をさすのが「おもしろき所」ではなかった。歌枕としての浦や磯を、歌をまじえて「歌語り」したのではないか。「……のうへを言ひつづくる」それは、ただ語ったという、日常会話のことばであったのではない。歌が詠むものであり、言うものであったことは、既に別に論じたことがある。「歌語り」として、「言った」のではなかったか。「うちほほゆがめて」語り、言うこと、「歌語り」であったことは、同時代の当時の作者も読者もわかり切っていた。知り尽くし、使い慣れていたことだから、「……のうへを言ひつづくる」とだけ表現すれば、それで十分事足りたのである。「歌語り」の経験、そういう体験を持つことが、ほとんどなくなってしまった現代人が、物語を読む時、自分達の生活経験を通した、そういう読み方がなされて来ることは、また、避け難いことであったに違いない。わたしには、そうは読めない、そう読むべきではない、という恣意的とも見える確信のようなものが、やはり、はっきりと存在しているのである。『伊勢』『土佐』『源氏』へとその基層に貫通する「歌枕」を離れて、物語を読み解いていくことは出来ない。玉鬘の巻が、西の国への流離、旅の物語を語っていく時、民俗学的発想、信仰を基層とする「つる草」にまつわる話型とともに、「歌」の技と心の論理、その伝統のなかで、みがき抜かれて来た、「歌枕」への、深いそして、熱い想いが、限りなく秘められてもいた。

岩波『新大系八代集総索引』「地名索引」によれば「水無瀬」の地名を詞書にもつ歌は十一例で、『新古今』の歌に限られる。

(1) 378「武蔵野やゆけども秋の」、(2) 543「もみぢ葉をさこそ嵐の」、(3) 801「思ひいづるお（を）りたく柴の」、(4) 1033

「思つゝ経にける年の」、(5)1101「草ふかき夏野分けゆく」、(6)1108「山がつの麻のさ衣」、(7)1136「水無瀬恋十五首歌合に、春恋の恋を皇太后宮大夫俊成女　面影のかすめる月ぞやどりける春やむかしの袖の涙に」、(8)1198「なにゆへ（ゑ）と思も入れぬ」、(9)1313「里は荒れぬお（を）のへの宮の」、(10)1333「見し人のおもかげとめよ」、(11)1336「しろたへの袖のわかれに」。

これらの歌は、後鳥羽上皇の離宮が置かれた所として、多くの歌がそれに関わる。『伊勢』八十二段と関わる歌は、全く存在しない。ただ、「資料(7)」だけは、脚注に「本歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」（古今・恋五・在原業平。伊勢物語四段）。」と注記するように『古今』『伊勢』の歌を本歌とする俊成女の歌であることが注意される。

これに対して「水無瀬川」は、『万葉』以来の歌語として詠まれ、摂津の国の歌枕として詠まれたのはいつ頃と解すべきかには、やや問題が存するように思われる。岩波『新大系八代集総索引』「地名索引」は、「水無瀬川」という地名は『古今』以下『新古今』まで八首の歌をあげている。ところが、『古今』三首『後撰』一首は、校注者によれば、歌語と解されているごとく、脚注が付されているように思われる。歌枕の脚注は『後拾遺』からで、1092番歌「絶えやせんいのちぞ知らぬ水無瀬川よし流れてもこころみよ君」が最初で、以下『千載』704、915番歌、『新古今』36番歌となって、語例は八首ということになる。「歌語から歌枕へ」という問題は、川の名が付された時という地誌的事実によるとしても、画然と一線を画することには、また困難な問題があるように思う。ただ、「八代集」の歌には、『伊勢』八十二段を意識に置いて詠んだ歌は皆無であるという事実だけは確かである。

このように見て来ると、『土佐』と『業平集』とに見られる『伊勢』八十二段との深い関わりは、そこに何を読みとるか、という問題を捨象するにしても、やはり、重要な問題である。『源氏』の作者は、歌語を操ることにしたたかで

あり、歌人としてのしたたかな誇りを持っていた。そのことが、超一流といわれる歌人、和泉式部に対する『紫式部日記』の評語であった。それは、歌合の席に出席できなかった恨みとか、負け犬的存在でしかなかった紫式部の咆哮とか、遠吠えとか、負け戦を仕組んだ、そうせざるを得なかったとか、そうした従来の考えに従い難いことは、別稿でくり返し述べて来たごとくである。『源氏』の作者は、和泉式部の歌とはあいいれない、歌論を明確に持っていた。玉鬘の巻末尾の歌論は、そういう論点に立って再検討を加えなければならないことも指摘した。「おもしろき所〴〵」の語は、『伊勢』『土佐』を貫流する歌論に、したたかに裏うちされた歌語への意識に深く関わる用語意識が存在していたのだ。『伊勢』も『土佐』も『源氏』玉鬘の巻も、歌枕の世界から古歌を借景に、歌を詠むという必然的な場面を構成していく。若紫の巻も、そういう視座から読んでいくと、また新しい物語世界が描かれていく。玉鬘の巻の物語は、乳母の女達による和歌の唱和から、「金の岬過ぎて、「我は忘れず」など、」と、歌枕をめぐって、古歌を思い浮べ、それを借景に、自然の風景、風物を観照し、眺望していく。それは、「おもしろき所〴〵」のもつ語誌を、用語意識の基層に自覚的に持っていったからにほかならない。そして、日本文学における「旅」の文学が、伝承的、伝統的に持ち続け、創り続けてきた「型」を、はっきりと物語作りの場に構造的に据え直すことが出来る才知、漠才をも持っていた。

## 二、「ふる人」用語考

### I

「右近」は、玉鬘の巻で「古人（ふる）」と呼ばれている。玉鬘の巻では、次のように用いられている。

(1)　右近は、何の人数ならねど、なをその形見と見給て、らうたきものにおぼしたれば、古人の数に仕ふまつり馴れたり。　（岩波『新大系』二　332頁）

(2)　世中のどやかにおぼさるゝまゝに、たゞはかなき御たはぶれ事をの給、おかしく人の心を見給あまりに、かゝる古人をさへぞたはぶれ給。　（同、357頁）

『新大系』脚注は、(1)、「（源氏に仕える）古参の女房の一人として。」、(2)、「右近のような年寄の女房にまで。」と注記する。

「(1)」について、岩波『旧大系』、新潮『古典集成』などは『新大系』と同じで、「古参の女房」。小学館『全集』は、「右近は、夕顔の死後、二条院に引き取られて以来、長年源氏の侍女として勤めている。」　(3)　81頁）と注記している。「(2)」について、新潮『古典集成』は岩波『新大系』に同じ。『旧大系』は、「年を取った者」（二　357頁）とする。岩波『旧大系』『新大系』ともに「人」に読み仮名は付していないが、吉沢『新釈』小学館『全集』などは濁音、新潮『集成』は清音で読み仮名を付している。『新大系』は諸注を参照した苦心の述作であることが知られよう。『河海抄』『紫明抄』などには、これらの語についての注記は見えない。『花鳥余情』にも、直接これらの語についての注記はないが、直前の「わかき人はくるしとて」に、「わかき人はつかふをはらたつほとに年おいたるとちはむつひよきとたはふれ給ふ詞なり」（源氏物語古注集成『松永本花鳥余情』　伊井春樹編　桜楓社　155頁）とあり、従来から「年経ぬる（どち）」と同意の語と考えられてきた。『孟津抄』に至って、「ふる人の数にとは祇候する人の中にてめしつかひ給也」（源氏物語古注集成『孟津抄　中巻』野村精一編　桜楓社　48頁）と注記している。

岩波『広辞苑　第四版』は、見出し語「ふる・ひと」「（フルビトとも）」とする。

小学館『日本国語大辞典』（17巻）は、見出し語「ふるーびと」「（古くは「ふるひと」）とする。『日葡辞書』をあげ

「(フルヒト) 〈訳〉長い年月を経た年老いた人または昔の人。歌語」と注記する。『広辞苑』は、「①昔の人。こじん」万葉集の用例、「②老人。」源氏　若紫「古人ども」の用例、「③古参の人。ふるくからいた人。」源氏　玉鬘の用例、「④昔なじみの人。」古今集の用例をそれぞれあげる。『大辞典』は、「①昔の人。すでに死んだ人。こじん。」万葉集の用例ほか、「②年をとった人。老いた人。老人。」青表紙本の一本、源氏　明石の用例ほか、「③古くからいる人。以前からそこにいる人。古参の人。」宇津保　藤原の君の用例ほか、「④古くから交際している人。昔なじみの人。また、かつて交わりのあった人。」万葉集の用例ほか、「⑤昔かたぎの人。古風な考えの人。」源氏　行幸の用例などを引用する。『八代集総索引』(岩波『新大系』) によれば、「古人」を句のはじめにもつ「八代集」の用例は、『広辞苑』が、「④」の用例としてあげる一例にとどまる。ただ、『新大系』は、小島憲之、新井栄蔵校注で、

731　陽炎(かげろふ)のそれかあらぬか春雨(はるさめ)のふる日となれば袖ぞぬれぬる

と表記する。『旧大系』は佐伯梅友校注で、「ふる日」の表記は変わらない。小学館『全集』は小沢正夫、新潮『古典集成』は奥村恒哉校注で、「ふるひとなれば」と仮名書きになっている。掛詞による表現の合理性は「ふる日」には違いないが、恋の歌としての主題からすれば、やはり仮名書きにするのが適切であるように思われる。『日葡辞書』が歌語として捉えているこの語が、『古今』の歌の恋の歌であることの事実は、「源氏読み」のなかで、いま少し注意深く、ていねいに考えていく必要がある。角川『新編国歌大観　古今』は「ふる日」とする。『古今』の異文「みれば」は、やはり「古人」を意識する本文と解すべきであろう。同書第二巻『私撰集編』の『古今和歌六帖　第一』「かげろふ」821番歌には、「ふる人みれば」として出ている。さらに、同書第五巻の『奥儀抄』536番歌、『和歌色葉』269番歌にも「ふる人みれば袖ぞひちぬる」となって重出する。第二巻の『索引編』によれば、「ふるひとに」(万・32)「ふるひとの」(万・557)「ふるひとみけむ」(万・1799)「ふるひとも」(新六帖860) などの形で歌が見える。これらの事実は、「ふる人」

の語が、歌語として用いられてきたことを示すものであり、『古今』731番歌が、「恋」の歌として伝承されてきた長い歴史的基層が存在することを示すものでもあることを実証するものだと考えなければならない。そればかりか、『古今和歌六帖』「かげろふ」の歌は、820番歌から828番歌に及ぶ九首であるが、すべて恋の歌、恋の心を揺曳する歌である。「あるかなきかのよ」(820)「恋し」(822)「いも」(823)「こぬよあまたに」(824)「たのむぞかたき」(825)「恋もする」(826)「人は恋しき」(827)「うつろひやすき君が心」(828)などの語句によって、それを知ることができる。同書第三巻『私家集編Ⅰ』索引によれば『公任集』392番歌も「雨ならではかなき空にふる人も露にもぬるる物とこそきけ」とあり、やはり同じ発想を揺曳している。けれども、『広辞苑第四版』(岩波)が、『源氏』玉鬘の巻「(1)」の用例を「③古参の人。ふるくからいた人」とすると、『万葉』以来、この語の語意が、同書「④昔なじみの人」に深く関わっていたことの意味を思量することなどは、徒労に過ぎない、笑止なことだとかえりみられなくなっていくのは、けだし当然のことであろう。『広辞苑』が「②老人」の用例としてあげる「古人ども」、『大辞典』がやはり「②年をとった人。老いた人。老人」の用例としてあげる青表紙本の一本『源氏』明石巻の「ふる人」は、「おい人」の語意に重なる。『広辞苑』は、「おいひと」の見出し語で、「年をとった人。としより。ろうじん」として『万葉』の用例をあげる。角川『古語大辞典』も「年寄り」として、『万葉』『徒然』の用例をあげるに過ぎない。ところが、「おいひと」の語を『新大系』『八代集総索引』で調べると、句のはじめには用いられていないことがわかる。角川『新編国歌大観　第一巻　勅撰集編』の「索引」によっても、この語を句のはじめにもつ歌は存在しない。同書『第二巻　私撰集編』の「索引」によれば、『万葉』に「おいひとにして」(2587)、「おいひとの」(1038)、「おいひとも」(4118)、「おいひとを」(3813)、の形で四首、『万代和歌集』『夫木和歌抄』に「おいひとの」(325および12363)の形でそれぞれ一首見える。『万代和歌』は中納言兼輔の歌、『夫木』は『万葉』大伴東人の歌との重出歌である。同書『第三巻　私家集編Ⅰ』の「索引」によれば、「おい人の」の歌は『兼輔

集』(18)『安法法師集』(52) にそれぞれ一首見えている。『万代和歌集』兼輔の歌は『兼輔集』との重出歌である。このように見てくると、『万葉』時代に歌語として比較的よく用いられた「おいひと」の語は、平安時代に入ってから、歌語としてやゝ衰退へと向かっていったように思われる。そして、そうした用語の推移の過程には、やはり「おいひと」に対する民俗信仰の基層に対する変容が深く関わっていたものと考えなければならない。「おいひと」の『源氏』の用例については、「ふる人」の検討以後、それと対比させて論述することにする。ただ「ふる人」の意味を考える用例として、「ふる人ども」の語例をあげることは、やはり複数表現に過ぎないと見る視点に誤りがあることを明確にしておかなければならないと思う。

『源氏』には「ふる人」の語例が『湖月抄』を底本とした『新釈本』(吉沢義則　平凡社)「索引」では十四例、『大島本』を底本とした『大成』「索引」では十三例、同じ大島本を底本とする勉誠社『源氏物語語彙用例総索引』では十三例となっている。ところが、『大成』「索引」勉誠社『総索引』などには見えず、『新釈』「索引」に見える明石の巻の用例は、小学館『全集』では次のようになっている。

(　) 心すごく聞こゆ。ふる人は涙もとどめあへず、岡辺に琵琶、箏の琴取りにやりて (2)65頁)

『全集』には本文についての注記はない。ところが『大成』底本の大島本には「心すごくきこゆる人は」とある。岩波『新大系』は、大島本によって、本文そのものに手を加えた校訂はしていない。『新大系』脚注に、「底本「きこゆる人」の本文不審。青表紙他の本多く「聞こゆ。ふる人」。河内本「きこえ(ゆ)としふる人はさらに。」「ふる人」は老人の意で、「入道。」と注記する。苦心されての注記である。大島本と同じ本文は池田本だけで、青表紙本の横山本、肖柏本、三条西家本は「きこゆふる人は」陽明文庫本は「きこゆふるに人は」の「に」が「見セ消チ」になっている。河内本系統では、「きこゆ」が、御物本、七毫源氏、大島本、平瀬本。「きこえ」が高松宮家本、尾州家本。「人は」が河内本で

はすべて「としふる人はさらに」となっている。大島本を底本とするかぎり、明石の巻に「ふる人」の語例が存在することを認めることはできない。諸本の異文は、やはり伝来の間に本文の解釈的意識がはたらいた結果であることは動かし難い事実である。『新大系』の校注者は、「不審」として、他の多くの青表紙本本文の「ふる人」を優位とする配慮が存在していたと見られる。さらに勉誠社『総索引』では、『大成』若菜上巻1097頁6行目「わらはにて京よりくたりけるふる人の老法しになりて」とあるのは、大島本を底本とした小学館『全集』本では「人の」となっている。青表紙本系統の陽明文庫本、池田本、国冬本、肖柏本、三条西家本は「人の」であり、同系等の横山本では「ふる」が補入されている。別本系の阿里莫本では「わか人」と対立する異文になっている。三条西家本を底本とした岩波『旧大系本』は「人の」となっている。『全集本』は、昭和50年5月刊の第二版によったが、明石の巻の語例にも、校訂の注記は付されていない。誤りと思われる。勉誠社『総索引』は『旧大系』『全集』の対応する頁数を示しているだけで、ともに「ふる人」の語例は存在しないという結果になっている。そして、これらの事実が重ねられていくとすれば、勉誠社の『総索引』なども一考を要することになるだろう。

明石の巻の用例は、資料番号を付さずに参考資料として示すことにするが、大島本、池田本の本文が、青表紙本系統本来の姿ー「原形」であったのかどうかは、きわめて疑わしい。三条西家本、河内本いずれかの側に「原本」の本文が存在したものと考えられるが、三条西家本など、他の多くの青表紙本の本文が「原本」であったとすれば、河内本は、大島本、池田本に対する解釈的本文であった可能性がきわめて強いと推定されるが、「ふる人」に対する用語意識の問題から、本文の類推批判が、あるいは可能であるとも思われる。

『大成』「索引」、勉誠社『総索引』には見えない初音の巻の明石の御方の歌、

（ ） 年月をまつにひかれて経る人にけふぐひすの初音きかせよ（『全集』(3)140頁）

を、『新釈本』「索引」では「ふるひと」の語例としてあげている。「経る人」が「古人」の掛詞となっていることは諸注の説くところで注を要しない。歌に続いて「「音せぬ里の」と聞こえたまへるを、げにあはれと思し知る。」とある。明石の姫君が母のもとを離れて、紫上のもとで養育されている、その寂しさ、つらさを、源氏も思いやっている。五葉の松に添える明石の御方の心情を、表現の表と裏という修辞的技法で処理することが「源氏読み」になるのか、ならぬのかの問題は、あえて論議しないが、『新釈本』、岩波『新大系』などのように「ふる人」の表記が適切である。明石の御方は「経る人」ではなく、以下論証するように、自からを「古人」として訴えているのであり、その心情が「北の殿よりわざとがましく集めたる（139頁）という表現のなかに秘められているようにも思う。明石の御方のこの歌も、やはり資料番号を付さないで「参考資料」としてあげておくが、以下述べるように、「ふる人」の用語意識を考えていく上で、きわめて重要な問題と示唆とを与えているもののように思われる。

(3) 殿御覧じつけて、いとあさましう、例のと思すに、御顔赤みぬ。「あやしき古人にこそあれ。かくものづつみしたる人は、ひき入り沈み入りたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」とて、（『全集』(3) 行幸 306頁）

玉鬘の裳着の祝いの装束が末摘花からとどけられる。それを見ての源氏の詞。物語には、装束の様を描く直前の部分に、

常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべきことのをり過ぐさぬ古代の御心にて、いかでかこの御いそぎをよその事とは聞き過ぐさむ、と思して、型のごとなむし出でたまうける。あはれなる御心ざしなりかし。

とある。それは「昔の人のめでたうしける」を、「よき衣箱に入れて、つつみいとうるはしうて奉れたまへり」という代物だった。傍線部草子地の『全集』現代語訳は、「殊勝なお心がけではある」とする。頭注には『湖月抄』を引き「草子地也。さし過たる無用の事を嘲弄してかける也」と注記する。源氏は、玉鬘に返事だけは出すように勧める。「父親王のいとかなしうしたまひける思ひ出づれば、人におとさむはいと心苦しき人なり」という。しかし御料の小袿の袂

に、例の同じ筋の恋い歌が添えてあった。

わが身こそうらみられけれ唐ころも君がたもとになれずと思へば

源氏は「いで、この返り事、騒がしうとも我せん」と、

唐ころもまたからころもからころもかへすがへすもからころもなる

と詠んで返す。玉鬘は、「君いとにほひやかに笑ひたまひて、「あないとほし。弄じたるやうにもはべるかな」と、苦しがりたまふ。」と思う。「ようなしごと、いと多かりや。」（308頁）という草子地で物語は終る。『全集』は「古人」を「妙に昔気質の人」とする。確かに、そういう一面をもつ。「古代の御心」（306頁）なのである。だが、源氏が如何に弁解し、避けようとしても、末摘花は、光源氏の想い人の一人であった。源氏の思惑、本音と建て前がどうであろうと、末摘花は、源氏の想い人の一人として、常陸の親王の鐘愛した女としての出自に、誇りをもって生きていた。源氏の「親王のいとかなしうしたまひける」という詞は、それと無関係であったわけではない。末摘花物語は、ほぼこの巻で終る。若菜上巻の病床にあって長いことが知られる物語がつけ添えられている。「をこ」物語として語られていく末摘花譚は、その見事な造形の影に隠れて、主題性を読みとりにくくなっているように思われる。末摘花譚を、主題の表現と関わりながら、人物造形が変容していく位相を重視して捉えるとともに、親王の晩年の鍾愛の女として、「をこ」物語のなかに振幅の差違を大きく表現しながら愚弄され、なおその誇りを捨て去ることなく、やはり、持ち続けようとしている。いわば「通時的原型構造」「普遍的」造形のようなものを、主題論としてその基層に読み解いていく必要があるように思う。

坂本共展氏は、末摘花について「人物紹介」「研究史の展望」を試み、「今後の課題」の項で、次のように述べている。

当時の読者は社会的実情に合わせて各々の登場人物を把握していた。親王の女と言っても、父親王の血筋や社会

的地位、また母親の家柄などによっての異なりの幅は大きい。末摘花にも現実社会の反映があるはずである。（「国文学」平成3年5月号　学燈社　「源氏物語の人びと」89頁）

坂本氏のこの論は、「今後の課題」という新しい提言ではない。諸説をふまえたほぼ平均的な見方として、通説のようなものになっている、いわば、人物論の基層をなすもののように思われる。氏は、さらに、「源氏と末摘花」（森一郎編『源氏物語作中人物論』勉誠社平成5年1月5日）のなかで、「主人公の愛情という点からすれば取るに足りない末摘花に（215頁）「妾」として高い地位を与え待遇する。」それによって「物語社会の人々に主人公の如何なる面を見せようとしているのか、読者に何を伝えようとしているのか」（215頁）、が問われなければならないことを、指摘されている。そして、「一院」と「女御」「更衣」の系図のなかに、末摘花、空蟬の関係を想定され、二人の女人でなければ語り得ない「物語の中の役割」が負わされていることの意味を指摘された。これに対して、島内景二氏は、「嫉妬する末摘花」（「国文学」学燈社平成5年10月号）で『伊勢』一四四段と末摘花との造型的関わりを指摘される。それは、さらに室町時代の物語『花島風月』で末摘花が冥途で「執心の鬼」になっていること、六条御息所以上の恐ろしい妄執にとりつかれた女人となっていること、「黒貂の皮衣」に、美女を醜女に変える「姥皮」を重ねて、『花鳥風月』からの逆照射による嫉妬する女人像の造型を見ようとする。これとは逆に、末摘花を「山の女」として、醜女の話型を見ようとする論などもある。民俗学的研究に端を発したかに見える「話型」論は、現代の「源氏読み」の大きな一つの流れともなっている。島内氏は、末摘花の変容を「立体化する表現」として捉え、心の表層と深層との表現と見られている。だが、「末摘花の造型方法の二面性は、光源氏の相対化に直結する」（97頁）として、「末摘花の物語は、霊験譚の構造を有している。」、「光源氏は困窮する末摘花を超法現的に救済する神仏である。」、「故常陸の宮の霊魂が娘に幸福をもたらすべく、人間の光源氏を動かしている。」と指摘される立論は如何なものであろうか。「話型」を強引に押しつけていく方法には、従い

難いものがあるように思われる。末摘花の人物論に及ぶ用意はないとしなければならないが、源氏の思惑、本音と建て前が如何なるものであり、それを物語の作者がどう捉えていたのか、という問題はともかくとしても、末摘花が、源氏の想い人、「妻妾」の一人としての誇りを持ち続けていた心意気、意識を離れて、末摘花を論じることは、やはり、正鵠を射たものではない、とすべきである。坂本氏の発言は、やはり、末摘花論の原点、始発点となっている、と考えざるを得ない。そして、こういう視座から、源氏が末摘花を「あやしき古人」と呼んでいると考えると、それは、源氏の過去の「想い人」に対するほろにがい思い、照れ隠し、源氏自身に対する物語作者のアイロニカルな戯画化、というような用語意識から用いられたきわめて意図的な用語であると考えざるを得ないことになる。「(3)」行幸の巻に見える末摘花の唐衣の歌「なれずと思へば」が『古今』『伊勢』の「なれにしつましあれば」の「なれ」と関わりながら、玉鬘の巻の「古人の数に仕うまつり馴れたり」の「馴れ」に続く用語意識の問題については、以下、別に論じることにするが、用語意識の連続する謎を読み解いていく必要がある。

(4)　老の波かひある浦に立ちいでてしほたるあまを誰かとがめむ

昔の世にも、かやうなる古人(ふるびと)は、罪ゆるされてなんはべりける」と聞こゆ。(『全集』　(4)　若菜上　100頁)

明石の尼君の、歌に続く詞。「昔の世にも」の頭注に「明石の君から女御への非礼を咎められたのに対して応酬する。「おきなさび人なとがめそかりごろも今日ばかりとぞ鶴も鳴くなる」(伊勢物語百十四段、後撰・雑一　在原行平)によるか。」とある。現代語訳に「私のような老人」。『伊勢』との関わりを指摘する『全集』の頭注には、岩波『新大系』(三272頁)にもそのまま引かれ、「関係するか。」と注記されている。小学館『全集』の『伊勢』は、旧、新編ともに福井貞助氏の校注。百十四段の頭注には変わりはない。「おきなさび」の歌について、『全集』新編頭注に、『後撰集』巻十五(雑一)在原行平、芹河行幸の日詠んだ歌である由の詞書がある。『古今六帖』第二(翁)・行平。同第五(かり

衣)」(210頁)と注記し、「芹河行幸は業平没後のことであるから、『伊勢物語』を業平物語と見ると、史実に照らして不審」とされた。「或本不可有之云々多本皆載之不可止」(底本勘物)の評語を付す。『源氏』諸注が引くように、『後撰』はともかくとしても『伊勢』から直接来たもの、それが直接の出典となっているとは考えにくい。『源氏』須磨の巻に、

○ おはすべき所は、行平の中納言の、藻塩たれつつわびける家ゐ近きわたりなりけり(『全集』(2) 179頁)

○ 須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。(同、190頁)

と見え、源氏と行平の境涯を重ねて、重層的に表現していく。行平像を揺曳しながら、光源氏像を造形しようとする。諸注は、『古今』雑下、事に当って須磨に籠っていた時の行平の「わくらばに問ふ人あらば」の歌『続古今』(羇旅「旅人は袂涼しくなりにけり」の歌を、それぞれ出典、引歌としてあげている。これらも『古今』はともかくとしても、直接の出典は別にあったように思う。『行平集』というような私家集、『古今六帖』の歌に関わる「歌語り」のようなものが出典となっていたに違いない。しかし、明石の尼君が行平譚、その歌をふまえた「歌語り」のようなものによって、自らも「ふる人」と表現する時、それは、ただの「老人」という用語意識にとどまるものではなかった、と考えていかなければならないはずである。「翁さび」「姥さび」と踊り出る「ある舞台」に踊り出るものの姿があった。ある種の芸能につながり関わっていくものの一つの姿がそこにあった。やはりそこには、照れ隠し、照れ笑い、自らを戯画化する用語意識がはたらいていた、そんな風に考えていかなければならない、と思う。それは、明石の尼君を、ただ「老人」として捉えているのではない。歌語を通して『伊勢』の世界に重ねながら、「翁さび」「姥さび」の新しい物語的世界を造型しようとする用語意識が存在していたのである。そこには、反権力像なるものが演技し仮装する老い人、舞台に踊り出る「ものの姿」が戯画化されている。このことについては、後に述べる。

(5) 我もうち泣きたまひて、「人の上にてももどかしく聞き思ひし古人のさかしらよ、身にかはることにこそ。いかに、うたての翁やと、むつかしくうるさき御心添ふらん」と、恥ぢたまひつつ、御硯ひき寄せたまひて、手づからおし磨り、紙とりまかなひ、書かせたてまつりたまへど、御手もわななきて、え書きたまはず。(『全集』 (4) 若菜下 261頁)

「源氏女三の宮を訓戒 柏木源氏に近づかず」とある物語。源氏は、自らを賢そうに出しゃばる老人だとする。『全集』頭注は『岷江入楚』三光院実枝説「老いたる人などのさかしらめくを無用の事をいふと昔は源の思ひ給ひしが、いつしか身の上になりたるとなり」を引く。「うたての翁や」は、現代語訳は「年寄りのおせっかい。」「「古人のさかしらよ」とともに、自嘲によって相手を恨むいやみである。」と注記する。現代語訳は、「いやな老人よ。」この部分には、「こよなくさだすぎにたる」(260頁)、「さだすぎ人」(260頁) ともある。「すっかり年寄りになってしまった」「老人をも」と現代語訳する。確かに、「年寄」「老人」などと現代語訳される語には違いないが、「さだすぎ人」「古人」「翁」には、微妙に異なる用語意識がはたらいている。女三宮に対する「夫」、女三宮という「妻」に対する源氏の立場が、自嘲的に、アイロニカルに表現されている、この微妙な表現の位相を読みとることなく、『源氏』を読むということは、絶対にできないはずである。

(6) 「いで、あなことごとし。例のおどろおどろしき聖詞見はててしがな」とて笑ひたまふ。心の中には、かの古人のほのめかしし筋などの、いとどうちおどろかされてものあはれなるに、をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり。(『全集』 (5) 橋姫 147頁)

「薫帰京の後宇治と文通 匂宮に告げ語る」物語。ところが、少し前に「老人の物語、心にかかりて思し出でらる。」(142頁) とある。「古人」は「老人」の言い換えに過ぎない、という論理が一見通りそうに思われる。『全集』現代語訳

は、「古人」を「あの老人のほのめかしたこと」。だが、やはりそれは誤りである。以下、宇治十帖に用いられている「ふる人」の全用例をあげる。

(7) つれなくて、これは隠いたまひつ。かやうの古人は、問はず語りにや、あやしきことの例に言ひ出づらむ、と苦しく思せど、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもや、とまた思ひ乱れたまふ。(『全集』 (5) 橋姫 155頁)

「薫、弁に対面、柏木の遺書を手渡される」物語。薫出生の秘められた物語を、の意。以下『全集』はいずれも「老人」(または「おいびと」)などと現代語訳する。

(8) こなたにて、かの問はず語りの古人召し出でて、残り多かる物語などせさせたまふ。入り方の月隈なくさし入りて、透影なまめかしきに、君たちも奥まりておはす。(同 (5) 椎本 174頁)

「薫、姫君たちと語り内省す 匂宮の懸想」の物語。やはり、薫出生の秘められた物語をの意。

(9) 東の廂の下りたる方にやつれておはするに、近う立ち寄りたまひて、古人召し出でたり。闇にまどひたまへる御あたりに、いとまばゆくにほひ満ちて入りおはしたれば、かたはらいたうて、御答へなどをだにえしたまはねば、「かやうにはもてないたまはで、昔の御心むけに従ひきこえたまはんさまならむこそ、聞こえ承るかひあるべけれ。なよび気色ばみたるふるまひをならひはべらねば、人づてに聞こえはべるは、言の葉もつづきはべらず」(同 (5) 椎本 188頁)

「薫、宇治を訪問し、大君と歌を詠み交す」物語。薫出生の秘密を知る弁を、の意。

(10) 中納言の君は、古人の問わず語り、みな、例のことなれば、おしなべてあはあはしうなどは言ひひろげずとも、いと恥づかしげなめる御心どもには聞きおきたまへらむかし、と推しはからるるが、ねたくもいとほしくもお

ぼゆるにぞ、またもて離れてはやまじ、と思ひ寄らるるつまにもなりぬべき。（同　(5)　椎本　192頁）

「薫、弁と対面して、尽きぬ感慨に沈む」物語。やはり、薫出生の秘められた物語を、の意。

(11)　けざやかにおとなびてもいかでかはさかしがりたまはむ、とことわりにて、例の、古人召し出でてぞ語らひたまふ。（同　(5)　総角　217頁）

「薫、弁を呼び、姫君たちのことを話し合う」物語。やはり、薫出生の秘められた物語を、の意。『全集』現代語訳「いつものように老人をお呼び出しになって、」。

(12)　「北面などやうの隠れぞかし、かかる古人などのさぶらはんにことわりなる休み所は。それも、また、ただ御心なれば、愁へきこゆべきにもあらず」とて、長押に寄りかかりておはすれば、例の、人々、「なほ、あしこもとに」などそそのかしきこゆ。（同　(5)　宿木　382頁）

「薫、中の君を訪れ、互いに胸中を訴えあう」物語。『全集』現代語訳「こういう古馴染の」。「古人」最後の物語中のこの用例は、「資料」(5)の、源氏の詞に見られる用語意識に対応、照応するものとなっている。柏木の乳母子「弁の尼」は、浮舟の登場によって、女三宮と柏木の秘められた物語を語る「問わず語り」の「例の」老人から、浮舟をとりもつ新しい役割を負って再び物語に登場してくる。橋姫の巻から「古人」として、薫出生の秘密の物語に深く関わってきた弁は、宿木の巻では既にその役割りを終っていた。弁は、秘密の物語に深く関わるとともに、宇治の八宮の姫君達と薫との恋の物語にも関わる存在であった。それが、宿木の巻を境に、薫と浮舟との恋物語に関わるという、新しい役割を演じていくことになる。「例の、人々」という表現に、そういう役がらの転換が、最も端的に示されている。そして「古人」が薫自身を指す詞として、中君の「過去の想い人」「古馴染」という意味をもって、新しい用語意識によってその語意が据え直されて来る。だが、薫は、中君に対して「過去の想い人」として満足し、その役がらだけで終り得

ることはできなかった。口説きの詞であり、薫の自嘲、薫に対する物語作者のアイロニカルな戯画化、演技ともいうべきものがこめられていたことは、また、隠された薫像の真実の姿でもあった。

「資料」(6)から(11)までの六つの語例は、すべて「弁の尼」に対して用いられている。弁は、既に指摘したように、女三宮と柏木との秘められた物語、薫出生の秘密の物語に深く関わりながら、また、宇治の八宮の姫君と薫との恋物語にも深く関わる存在であった。そして、宿木の巻以後は、薫と姫君たちとの恋物語にも関わっていく「老い人」でもあった。弁を「問わず語りする老い人」像として捉える従来の見方は、確かに、それは、それとして一面の妥当性をもっている。だが、弁を単に「老人」として捉えることは誤りである。女三宮の秘められた過去、薫の出生に関わる秘密の恋の手引きに関わった女人、そういう「想い人」達の過去に関わった女人としての「生」が、やはり、宿木の巻以後の姫君達との物語と必然的に関わっていく。弁が、そういう過去を背負いながら、反照の世界を形成しているのだと考えなければならないのではないか。だが、そういう役がらに転じる弁は、もはや「古人」ではなくなってしまう。それは、柏木、女三宮という「想い人」の遠い過去を背負い、「想い人」の再来を現世に示現する「もの」の姿を、その背後に揺曳し続けている女人像としての「古人」でもあった。そして、そのように考えてくると、「古人」は、弁自身に対する呼称ではなく、弁の果す役割とか、役がらのようなものに対する呼び方であったと考えなければならない。『源氏物語事典』(三谷栄一編　有精堂)「作中人物索引」によれば、弁は、「老い人」「古者」「弁」「古人」「弁の君」「御乳母子」「弁御許」「尼君」「朽木」「弁尼君」「尼」などと呼称される。そういう多様な呼称のなかで、弁に対する「古人」の全用例が、既に述べてきたように、きわめて限られた同一の場面にしか用いられていないという事実は、きわめて重要な問題として、やはり、注意しなければならないことである。

さらに、『源氏』の中で、「弁」と呼称されている登場人物は何人かあり、その区別、分類に問題がないわけでもない

が、「作中人物索引」によれば、「弁」二人、「べんのあま」「べんのおもと」二人で、合計人数は五人ということになっている。それは、紫上の乳母子、藤壺の乳母子、柏木の乳母子、玉鬘の女房、女一宮の女房と見られる女人達である。藤壺と源氏との密通を手引きしたり、女三宮と柏木との密通を、柏木方からはたらきかけたり、玉鬘と髭黒との逢う瀬を手引きしたりする、というような役割を演じていて、当時の乳母子達が、女主人公に対して持っていた絶大な影響力や、男主人公に尽くしきる女人「侍い人」の姿を示す物語になっている。そればかりか、これらの女人達は、男主人公達の愛妾「召し人」として、複雑な男女関係を形成する場合もあった。弁は柏木の乳母子として、柏木と女三宮の密通に、宮方の女房にわたりをつけるとか、何か積極的な役割を果たしていたと思われるし、柏木の愛妾の一人、召し人的な存在であったとも憶測される。柏木の遺言を托されていたのは、やはり、そうした深い事情を持つ女人であったからでもあったろう。弁が、そういう立場に生きる人であったとすれば、柏木と女三宮の秘められた物語、薫出生の秘密の物語に関わっていくことになる。問わず語りする老い人像を背負っていく弁が、「古人」と呼ばれる理由が、もっと明確な形で表現されることになる。如何なものであろうか。弁が、「古人」と呼称されることの必然性は、明確な用語意識によるものとして、理解することができる。

以上、検討を加えてきた「ふる人」の用例について、これを一覧にまとめて表示すると、およそ、次のようにまとめることができる。既に一覧によって表示したように、「古人」の辞書的意味は、岩波『広辞苑』と小学館『国語大辞典』の語意表記で「①」から「④」までは、順序が同じで、『大辞典』だけが「⑤」の意味を加え、『源氏』行幸の巻の語例をあげている。『辞典』の意味分類と私案の意味分類の番号は、『国語大辞典』によって示した。

| 資料番号 | 巻名 | 誰から | 誰に | 『全集』現代語訳 | 『辞典』意味分類 | 私案 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) | 玉鬘 | 物語作者 | 右近 | 昔からの女房 | ③ | ④(③) |
| (2) | 玉鬘 | 物語作者 | 右近 | 年寄り | ② | ④(②) |
| (3) | 行幸 | 源氏 | 末摘花 | 昔気質 | ⑤ | ④(⑤) |
| (4) | 若菜上 | 明石尼 | 自分自身 | 老人 | ② | ①②(④) |
| (5) | 若菜下 | 源氏 | 女三宮に源氏自信 | 老人 | ② | ④(②) |
| (6) | 橋姫 | 物語作者 | 弁 | 老人 | ② | ②(④) |
| (7) | 橋姫 | 物語作者 | 弁 | 老人 | ② | ②(④) |
| (8) | 椎本 | 物語作者 | 弁 | 老人 | ② | ②(④) |
| (9) | 椎本 | 物語作者 | 弁 | 老人 | ② | ②(④) |
| (10) | 椎本 | 物語作者 | 弁 | 老人 | ② | ②(④) |
| (11) | 総角 | 物語作者 | 弁 | 老人 | ② | ②(④) |
| (12) | 宿木 | 薫 | 自分自身 | 古馴染 | ④ | ④(②) |
| 参考資料 | | | | | | |
| | 明石 | 物語作者 | 明石入道 | 老人 | ② | ②(④) |
| | 初音 | 明石御方 | 自分自身 | 過ごしている人 | 掛詞で②とも | ④(②) |

「ふる人」の『源氏』全用例一覧の「参考資料」としてあげた語例のうち、明石巻の用例には本文上の問題がある。『全集』旧・新編ともに同じで、本文校訂に問題がある。大島本を底本とすれば、「ふる人」の語例は存在しないはずである。池田本だけが大島本と同じで、その他の青表紙本は「ふる人」の語をもつ。しかし、河内本は、すべて「としふる人」となっている。桜楓社『源氏物語別本集成』によれば、底本の『麦生本』、校異に採択された『阿里莫本』も「ふる人」（第四巻　86頁）となっていて、対校された大島本とはやはり、異文を形成している。『別本集成』の前提となっている本文系統論には疑問が存するように思われるが、これも参考資料として注記しておく。「初夏の月夜、源氏琴を弾き、入道と語る」、この物語は、明石の入道を「老人」と解しただけでは、やはり片手落ちになってしまう。入道が、なかなかの風流人の一面を持っていたことは、別に指摘したことがある。源氏と女明石の御方との恋の手引きも辞さない、そこには、柏木と女三宮との逢う瀬に、おそらく手を借したように思われる「弁」の尼の姿を連想させるものがある。そして、それは、おそらく柏木に愛された若き日の弁であり、入道の老いの姿に反照しながら、それと対応する対偶の世界でもあった。明石入道を「古人」とすることは、大島本、池田本を除く諸伝本に共通する異文である。それが、入道の長年に亘っての、どういう目的意識、霊験に支えられ、導かれるものであったとしても、恋の手引きに深く関わるすき人の面影は、やはり背負い続けている。「古人」明石入道の人物像の造型は、そういう物語の場面性に深く関わる呼称であった。だが、入道の姿には、弁の持つもう一つの側面、問わず語りする姥、翁の姿が見えないように思われるが、老いのくりごとを語る入道の姿には、やはり、「問わず語り」する「翁」が存在する。若菜上の巻で、明石の尼が、自分自身を「古人」と呼称する姿のなかに、弁の尼が問わず語りに薫出生の秘められた物語、柏木と女三宮の秘密の物語を語る「姥」の姿の反照がある。それは、宇治十帖のなかで、謎解かれるように、明石の尼の「語り」が、物語本文の書かれた内容とともに、書かれざる物語の内容が何であったかを読みとらせていく。『源氏』は、その

物語享受の様態から、そういう、仲間うちだけに理解できる黙契のようなものが、存在していたはずであった。弁の造型は、明石入道と明石の尼君の二人の人物を投影し、その反照として造型されていったことを、読み解かなければならないと思う。一覧のなかで、「④」の意味を隠されたものと指摘し、「①」の意味の並列を指摘したのは、『後撰』『伊勢』などに見られる行平像を重ねて、問わず語りする「姥」の何か舞台に登場して演じるような語りの場を連想してのことであった。『後撰』雑一、『伊勢』百十四段などに見える在原行平譚、そういう類の物語が存在しなければ、尼君が、「老の波」に続く「昔の世にも、かやうなる古人は、罪ゆるされてなんはべりける」（『全集』(4) 若菜上100頁）という詞は出て来ないように思う。「昔の世にも」「はべりける」という表現は、そういう事実の存在を明確に伝えている。明石一族、その「幸い人」の素姓や、それを支える神仏の加護、霊験譚が、どう関わっていようと、源氏の想い人、懸想人としての「古人」の語は、「物語読み」のなかで、ずっしりと重い意味を背負いながら迫ってくる。初音の巻で、明石の御方が自分自身のことを「経る人」「古人」と掛詞的に呼称した意味は、「資料(3)」で末摘花を「古人」と言った源氏の詞が、如何なる意味を表わしていたのか、既に指摘したことと、やはり、それは、同一の用語意識にもとづいていると考えなければならない。そこには、明石の御方の誇り、自意識の高揚する心情を源氏に訴えようとする意味があった。明石の御方は、姫君の生母としての誇り、源氏の過去の想い人であったことを正面に捉え、控えめで遠慮がちではあるが、はっきりと言い切っている。

このように考えてくると、歌語「古人」を物語の「ことば」として、表現のなかに取り込んできた物語作者の用語意識を「源氏読み」として、読み解いていくことは、きわめて大切で、重要なことがらだといわなければならない。容易に、辞書的な意味を言い換える現代語訳は誤りである。だが、既に見てきたように、「弁」に対して、「老い人」など、いくつかの呼称が用いられていた。「作中人物索引」（『源氏物語事典』）によれば、「右近」と呼称される人物は三人で

ある。夕顔の乳母子で、母が死んでから夕顔の父三位中将に育てられた右近は、「右近の君」「女」「古人」「夕顔の君の右近」などと呼ばれている。「ふる人」の語は、やはり「古人ども」「老い人」「老い人ども」などの語を視座に入れて検討されなければならない。

「ふる人ども」の語例は、勉誠社『総索引』も、平凡社『新釈本』「索引」もともに七例で、本文上の問題はない。『大島本』も『湖月抄本』も同じということになる。小学館『全集』の頁数、現代語訳などを一覧に示す。

(1)若紫　(1)328頁。少納言の源氏に対する詞。現代語訳「古女房達」。頭注「老女房」。

(2)藤裏葉　(3)448頁。物語作者が左大臣邸の様子を。現代語訳「古くからいる女房たち」。

(3)藤裏葉　(3)449頁。(2)と同じ、現代語訳「古参の女房ども」。

(4)鈴虫　(4)367頁。物語作者が女三宮出家に当って乳母、侍女など人々を。現代語訳「御乳母や古くからお仕えしている女房は」。

(5)椎本　(5)167頁。物語作者が中君に仕える女房達に。現代語訳「老人どもが」。匂宮に返歌をすすめる。頭注に「『岷江入楚』は「弁の尼などのことなるべし」とするが、「古人ども」とあるから、そう限定する必要はない」。と注記。この注記は注意すべきである。

(6)早蕨　(5)343頁。物語作者が宇治八宮邸の女房達を。現代語訳「(地道な)老人たち」。348頁に「弁ぞ「かやうな御供にも、思ひかけず長き命いとつらくおぼえはべるを、人もゆゆしく見思ふべければ、今は、世にあるものとも人に知られはべらじ」とて、かたちも変へてけるを」、とあり、「古人ども」のなかに弁は入っていないと考えなければならない。

(7)東屋　(6)67頁。浮舟の容貌を女房達が。現代語訳「老人たち。」

「ふる人ども」の語例には、「ふる人」に見られるような用語意識は見られない。しかし、「資料」(5)、(6)には、やはり「弁」は入らず、「ふる人」弁とは、やはり区別されていると考えなければならない。『源氏』に用いられている「ふる人」と「ふる人ども」とは、それが単数、複数表現の違いにすぎないのではなく、その用語意識が異なること、そういう位相性を読み解いていかなければならない。

「老い人」「老い人ども」の語例も、勉誠社、平凡社「索引」に異同はなく、それぞれ、二十八例、十一例となっている。大島本、湖月抄本による本文上の問題は存在しない。「ふる人」には、諸伝本による本文の異同があり、いくつかの問題点が存在した。このことは、既に指摘したごとくであるが、この事実は、やはり「ふる人」の語が、作者や読者によって注意深く使われ、読まれてきたこと、操られた語として、用語意識の問題と深く関わって創作、享受されてきたことの、一つの傍証となるものだと考えなければならない。語意の重なる部分を持つ、「ふる人ども」「老い人」「老い人ども」などの語が、あるものは巻による片寄りを示しながらも、「ふる人」とこういう対応する表現をなしていることは、従来の「源氏読み」のなかでは、あまり注意されて来なかったように思う。そういう長い享受の伝統のようなもののなかで、かつて「中古文学会」山形県立米沢女子短期大学での筆者の研究発表以来、ある一つの馴染みにくさ、異端性を持ち続けてきたように思う。だが、一応の成果は『源氏物語「本文と享受」の方法』(和泉書院　平成四年十二月)として世に問うた。そして、その「解題」は、「信州豊南女子短期大学紀要　第十号」に発表した。本稿も、また、それらの研究と一連する成果である。「異論も多い」ように思うが、「特殊な用語」、「歌語」を通して、その用語意識を読み解いていく必要があることを指摘しなければならない。

「老い人」の語例二十八例は、次のように用いられている。小学館『全集』によって一覧に示す。

(1)空蟬　(1)201頁。物語作者が空蟬の女房を。現代語訳「老女房」。
(2)末摘花　(1)355頁。末摘花の乳母だった老女房を。現代語訳「乳母めいた老女」。
(3)蓬生　(2)332頁。末摘花邸の女房を。現代語訳「老人」。頭注「この邸以外には行きどころのない、役立たぬ老女房」。
(4)蓬生　(2)336頁。(3)と同じ。現代語訳「老女」。
(5)蓬生　(2)337頁。惟光の詞で。(4)と同じ人物。現代語訳「老人」。
(6)玉鬘　(3)102頁。夕顔の乳母を指す。現代語訳「年寄り」。
(7)玉鬘　(3)108頁。(6)と同じで、乳母を指す。現代語訳「老人」。
(8)橋姫　(5)135頁。八宮邸の女房を。現代語訳「老女」。
(9)橋姫　(5)136頁。本文を引用する。
この老人はうち泣きぬ。「さし過ぎたる罪もや、と思うたまへ忍ぶれど、あはれなる昔の御物語の、いかならむついでにうち出できこえさせ、片はしをもほのめかし知らしめさせむと、年ごろ念誦のついでにもうちまぜ思うたまへわたる験にや、うれしきをりにはべるを、まだきにおぼほれはべる涙にくれて、えこそ聞こえさせずはべりけれ」。
「弁」を指す。現代語訳「老人」。薫に出生の秘密を昔語りにほのめかす最初の場面であることに注意すべきである。
(10)橋姫　(5)142頁。本文「老人の物語」。(9)と同一人物を指す。物語は具体的には語られない。プロローグとして奏でられる。
(11)橋姫　(5)143頁。薫が左近将監を使者に弁に手紙を託す時の詞。(10)と同一人物を指す。

(12)橋姫　(5)151頁。(10)と同一人物を指す。現代語訳「老人」。薫に遺書が手渡される物語。
(13)椎本　(5)170頁。(10)と同一人物を指す。頭注に「わが出生の秘密を残りなく教えてくれた老女房、弁」。
(14)椎本　(5)190頁。(10)と同一人物を指す。現代語訳「老人」。
(15)椎本　(5)204頁。(10)と同一人物を指す。現代語訳「老人」。
(16)総角　(5)221頁。(10)と同一人物を指す。現代語訳「老人」。
(17)総角　(5)237頁。(10)と同一人物を指す。小見出しに「喪明け、薫宇治を訪問、女房手引きの用意」とある物語。
(18)総角　(5)248頁。(10)と同一人物を指す。現代語訳「老人」。
(19)総角　(5)260頁。匂宮の後朝の文をめぐる宇治宮邸の女房に対する匂の心。「弁」と特定すべき確証を欠くか、匂の一般的推測とも。現代語訳「老人（のしわざ）」。
(20)総角　(5)264頁。(10)と同一人物を指す。現代語訳「老人」。
(21)総角　(5)305頁。(10)と同一人物を指す。現代語訳「老人」。
(22)宿木　(5)442頁。(10)と同一人物を指す。現代語訳「老人」。
(23)宿木　(5)478頁。浮舟一行のなかの女房。現代語訳「年配の人」。
(24)宿木　(5)480頁。(23)と同一人物。現代語訳「老人」。
(25)手習　(6)278頁。横川僧都の母尼。現代語訳「老人」。
(26)手習　(6)310頁。(25)と同一人物。現代語訳「老人」
(27)手習　(6)316頁。(25)と同一人物。現代語訳「老人」
(28)手習　(6)317頁。(25)と同一人物。現代語訳「老人」

「老人」の語例にも「ふる人」に見られるような、用語意識による片寄りが、やはりある程度存在する。それは、この語が、既に指摘したように『万葉』以来の歌語であったことに深く関わる。だが、歌語を操るという表現技法から見ると、「ふる人」ほどに意識的、意図的ではなかった。片寄りながらも、拡散していく用語上の意識が、そういう事実を如実に示している。ただ、歌語への片寄り、意識という点では、やはり注意しなければならない。これらの事実は、次のような一覧によって示すことができる。

空蟬の女房。(1)空蟬・
末摘花の女房。(2)末摘花・(3)蓬生・(4)蓬生・(5)蓬生・
夕顔の乳母。(6)玉鬘・(7)玉鬘・
八宮邸の女房。(8)橋姫・(19)総角)
弁。(9)橋姫・(10)橋姫・(11)橋姫・(12)橋姫・(13)椎本・(14)椎本・(15)椎本・(16)総角・(17)総角・(18)総角・(20)総角・(21)総角・(22)宿木
浮舟一行の女房。(23)宿木・(24)宿木
横川僧都の母。(25)手習・(26)手習・(27)手習・(28)手習

「ふる人」に対する「ふる人ども」がそうであったように、「老い人」に対する「老い人ども」十一例の語例についても、その用語意識が明確でないことは同じである。「老い人ども」について、一覧によって示すと、およそ、次のごとくである。小学館『全集』によった。巻名下の算用数字は頁数を示す。

| | |
|---|---|
| 末摘花邸の女房達 | (1)末摘花365・(2)末摘花370・ |
| 三条殿の女房達 | ※(3)藤裏葉449・ |
| 八宮邸の女房達 | (4)椎本183・(5)総角244・(6)総角270・(7)総角308・ |
| 京の邸での中宮の女房達 | (8)宿木393・(9)宿木427・ |
| 小野僧庵の人々 | (10)手習291・(11)夢浮橋363・ |

※同一頁に「古人ども」の語があり、頭注は「同じか」とする。

「ふる人ども」「老い人ども」の語例は、このように、それぞれ「ふる人」「老い人」に対して、その用語意識が明確であり、意図的に操られている語であったとは考えにくい。従来、単数と複数表現との違いに過ぎない。本質的に語意に関わる問題であるという捉え方はして来なかったように思う。だから岩波『広辞苑』なども、無造作に、異なる語例とはして来たのだと思う。しかし、『源氏』の作者には、そういう単数、複数表現の違いとしてではなく、「歌語」と「歌語でないもの」とする、より本質的な語意の捉え方の相違が存在していたように思われてならない。「おもしろき所〳〵」で示された小山利彦氏の「歌枕」という論理は、やはり、もっと正面に据え直して、読み解かれてもよかったのではないかと思う。

「ふる人」の語が『古今集』『古今和歌六帖』へ、さらに『奥儀抄』『和歌色葉』の歌へと流伝、伝承され、さらにまた、『公任集』に見える語でもあったことは、既に指摘したごとくである。物語の作者は、そういう歌語を操る歌人意識を誇る作家でもあった。それを謎解きのように読み解いていくことに、物語の作者も読者も、ある一つのよろこびを感じていたように思われる。物語の作者は、『古今』『古今和歌六帖』は、かなり深く読み込んでいたように見える。

『古今和歌六帖』と空蟬、帚木の巻の物語との関わりは、既に別に指摘したことがある。『古今』から『古今和歌六帖』「かげろふ」の歌へと続く『万葉』以来の歌語「ふる人（降る日と「経る人」）に対する物語作者の想い入れは、並々のものであったとは思えない。『公任集』の本文、成立については明らかでない部分も多い。岩波書店『日本古典文学大辞典』によれば、次のごとくである。摘記する。冒頭に春の歌が置かれ、ほぼ四季の歌が季節順に配列されている部分をはじめに、種々の歌が集められている。公任を三人称で表記しているので他撰の家集だろうとされ、贈答歌には恋の歌が少ない、という。

『公任集全釈』（風間書房、平成六年五月三十一日）の井伊春樹氏の「解説」によれば、「『公任集』がまとめられたのは、すくなくとも道長が没した万壽四年十二月四日以降」であるが、既に「原資料」が存在していたと考えられている。（31頁）やはり、「解説」のなかで、津本信博氏は、公任が爲頼とも親しく、「爲頼の弟は紫式部の父爲時である。公任が紫式部の『源氏物語』執筆の事情に通じていたことも予測できる環境にあったことも確かである」。（46頁）と指摘されている。逆にいうと、紫式部も、また、『公任集』の「原資料」となった「私歌集」の類を見ることが可能であり、その影響を受けやすい環境にあったことを示している。『紫式部日記』の公任に対する記事からすれば、その摂取はもっと積極的、意識的であったように思われる。そればかりか、三八六番歌から四九四番歌前後の歌については、検討を加えなければならない問題がある。三八七番歌から三九四番歌、あるいは三九六番歌あたりまでは、一連の歌と考えてよさそうである。『全釈』で、津本信博氏は次のように指摘されている。三九三番歌の「参考」を引用する。

『新後拾遺集』（巻一二・恋一・一〇三一）に、殿上の人人一品宮にまゐりてものいひける人に、雨のふりければいそぎかへりて、つとめてつかはしける。前大納言公任

あかでこし空のしづくは秋のよの月さへくもる物にぞ有りける（319頁）

三九四番歌の「参考」

『和泉式部集』に、

九月ばかり、鶏の音にそそのかされて、人の出でぬるに

人はゆき霧はまがきに立ちとまりさも中空に眺めつるかな（一八二）

として収められており、『風雅集』（巻一一・恋二・一一三三）にも「九月ばかり、あかつきかへりける人のもとに和泉式部」として入集する。すると一品宮邸で公任の相手をしていた女房は和泉式部であったことになる。彼女は、少女時代にすでに昌子内親王（冷泉后）に出仕し、道貞と結婚した頃もそのもとに宮仕え中であった。この場面は、何かの事情で一品宮邸に滞在していた頃なのであろうか。なお、和泉式部は、天元元年（九七八）の出生とする説が有力だが、この一連の歌を一品宮の出家した寛和二年（九八六）の詠とすると、彼女はわずかに九歳にしかすぎなくなる。これでは、とてもこのような恋の歌は詠めるはずがないので、もうすこし後のことであろうか。

後考にゆだねたいが、ただ公任と和泉式部とはかなり早くから交渉を持っていたことが知られよう。（320頁）

と、指摘されている。「後考にゆだねたい」とする津本氏の、これらの指摘は、また、きわめて重要である。それは、第一の問題として『新後拾遺集』『風雅集』の詞書きによるという前提の問題である。『新後拾遺集』は、後円融天皇の下命により、二条為遠、没後為重撰。成立は至徳元年（一三八四年）。足利義満の執奏、二条良基の仮名序を持つ、二条派優位の歌集。十四世紀、中世の成立に成る第二十番目の勅撰集である。『風雅集』は、第十七番目の勅撰集で花園院監修、光厳院撰。貞和五年（一三四九年）成立。巻頭に花園院の真名序と仮名序を置く。京極派の総決算の歌集。いずれも十四世紀中頃以後、中世の成立に成る勅撰集で、その詞書きをそのまま信じ得るか、という問題がある。第二の問題として、和泉式部の出生についての有力な説と少し合わないという問題もある。『伊勢』の注釈史、揺曲の登場人

物の相関図には、中世的伝承の世界が、その基層に存在することが、片桐洋一氏らによって指摘されているが、そういう伝承の世界と関わるものではないか、という問題もある。津本氏の指摘された問題についての論述は、まだ管見に入っていない。しかし、『風雅集』の詞書きなどによるかぎり、公任と和泉式部との間には、かなり早い時期からの交渉があり、紫式部もそのことを知悉し、心を動かすものがあったに違いない。こういう視点から、『紫式部日記』の公任、和泉式部についての記事を読み解いてみると、また、新しい論点が浮かびあがって来るのである。『公任集』には恋の歌が少ないと言われているが、これら一連の歌は、やはり恋歌だということになりそうである。

和泉式部の返歌だと言われる三九二番歌、

雨ならではかなき空にふる人も露にも濡るるものとこそ聞け

という歌の『全釈』津本氏の現代語訳。

雨でなくとも、はかないこの世にすごす人は、露にさえも濡れてしまうと聞いていますよ。

「空「雨」の縁語。世の中の意に用いる。ふるひとも「雨」の縁語で「降る」と「経る」をかける。」(318頁)と、「語釈」する。和歌という短詩形の文学作品の意味、主題を捉えることは、けだし、至難の業であろう。この三九一番歌と三九二番歌との「会話」のことばは、いったいどういうことであったのか、そういう問題を考えてみなければならない。公任の歌は、「秋の夜長を、あなたと過ごしたいと思っているのに、あなたの心はさめてしまったのか、お会いしないで過ぎていく日かずが経ってしまった。いくらこの季節に降る雨でも帰らないと心に決めています。」という歌意であろう。和泉式部の歌。「お会い出来ないで、空しく過ぎていくことを嘆くあなたと同じように、私も秋の季節のものである雨どころではなく、露にさえ濡れて嘆いているのです。ほかのお方の薄い情けにあなたが濡れていると聞いてもいます。」というような歌意になるのだろうか。恋の想いを揺曳し、季節のものに託して詠んだ贈答歌であった。しかし、

和泉式部の歌は、「ふる人」の歌語が、しっかりと座っていない。「降る人」「経る人」で、「ふる人」という歌語が、直接響きあわない。口ばやではあるが、修辞的技法としてすっきりとしていない。紫式部は、そういう和泉式部の手薄さ、表現力の未成熟さにつけ込んだのではないだろうか。そこには、『公任集』から、かえって和泉式部へと逆照射し反転する歌語の世界が、存在しているように思う。このように考えてくると、『古今和歌六帖』、『公任集』、『源氏』の歌語「ふる人」をめぐる用語意識の関わりは、きわめて大切で、重要な問題を示唆しているものだと考えなければならない。

永井和子氏の「物語と老い」――源氏物語をひらくもの――」（「国語と国文学」平成六年一月号　東京大学国語国文学会）は、若菜上巻の「老いしらへる」という用語を捉え、女三宮の降嫁をめぐり、

> 朱雀院の錯綜し迷い続ける深い心中に潜在し、慎重に考えて決して表現されなかったものを引き出し、光源氏を言葉の上で顕在化させたのは、「老いしらへる」女房であった。ここの場面では、過去を知る昔人というばかりではなく、中心的な人物の心内状況とは関係なく表現したというそのことが、状況そのものを変化させる役割を負うている。ここで着目するのこうした物語の叙述、語り口に於ける「老いしらへる」女房の表現者としての機能である。（5頁）

と指摘されている。そして『源氏』の用例に七例存在するこれらの語が、いずれも「これに似た状況」であると言われる。一方「翁」は、「身分の更に低い男性老齢者」を指し、「老い人」以上に異質性が加わり、よりおどけ、もどき、とぼけ、一筋縄ではいかない別様の「語り」を担当する」、と指摘される。そして、「老者は静的な沈黙者」ではなく、「声をあげる表現者」として存在している、と言われる。永井氏は「老い人」「老い人ども」を集計され、三十九例として二語を同じ次元に立って考察されているが、既に指摘したごとく、それは単なる単数、複数表現の違いという問題ではなかった。やはり、表現の位相を異にしていると考えるべきであり、それは、誤りである。その結論にもまた、従い

難いものがあるように思われる。氏は、更に、「物語史と老い」の項で、

物語史において語り手の仮託を最も有効に用いたのは源氏物語であり、沈黙から表現への飛躍の手段のひとつとして、老いの要素を内部に積極的に取り入れたのではないかと考えるのである。（11頁）

と、述べられている。『源氏』に用いられている「物語」の語例を通して、物語の「始原」を考え、『物語文学成立史』（東京大学出版会　1989年12月20日）で、折口学、三谷学における「物語史」の発生と展開とは異なる異質の史論を示された藤井貞和氏の論理も、やはり、本質と末流とを取り違えた矛盾した論理の道筋を遡っているように思われる。「嫗」や、「翁」の物語は、「もの」が語る物語の伝承を基層にしているし、幼児や童の語る物語は、物快調伏の場で「依りまし」に移された「もの」の語りの残照であるし、巷間の物語は、辻占の対象となる話や「歌語り」の断片化、通俗化の「語り」でもあって、その本貫に根ざすいわば根生いの「始原」とでもいうべきものではなかった。折口学の末流の徒からも、藤井氏の論理に疑問がさし挟まれないのは、いかがなものだあろう。本質と末流とをない合わせる矛盾が末流の徒にも存在するように思われる。これらの問題については、記紀景行天皇の物語、ヤマトタケルの崩御をめぐる説話の分析を通して、別に論述したが、更に再論を試みたいと考えている。ただ、永井氏が指摘されるように、確かに物語をひらくものとして「老い」が存在することは、確かなことではあるが、それは、「もの」が語った「物語」「もの」を語った「物語」という長い伝承、民俗信仰をその背後に負い続けている伝承の基層が存在していたことを考えなければならない。そこには、さらに、「歌語」を操る、物語作者の歌学に対する深い学識、和泉式部に代表されるような時代の風潮、時流の歌風を超えて輝いている歌人としての学才、誇りともいうべきものが見られる。そして、また、そこには、「ふる人」のいる風景と「老い人」のいる風景とが、重なる部分を持ちながらも、それとは、まったく違う表現の位相・異質の世界を描いていた。これらの問題については、以下項を改めて別に述べることにする。

## Ⅱ

ふる人「右近」の、再登場を語る玉鬘の巻の冒頭は『河海抄』以来、末摘花の巻の書き出しによく似ていることが注記されてきた。

此巻の始末摘花巻と同様なり何も其説ある也末摘花巻は若紫の次なれとも横の並なる故に夕顔の巻につゝけん為めにかけり此巻又玉鬘の君のことを出来へきためによりて先夕顔の上の事を思出せり

共以有深致矣

又露わすられすは夕顔の巻に夕露にひもとく花或は光ありとみし夕顔のうは露なとありし心歟（『河海抄・花鳥余情』古注釈大成　日本図書センター　223頁）

末摘花の巻の冒頭は、「思へどもなほあかざりし夕顔の」と、五音七音のリズムをくり回し、あるいは一首の和歌に仕立てられたり、『古今』の歌を原拠とする修辞など、和歌との深い関わりを連想させる。末摘花の巻が、そういう書き方をしていることの根底には、常陸の親王の歌学、教養を深く身につけた末摘花の生き方を語る物語の主題との関わりが見られる。「から衣」の歌を詠む「ふる人」末摘花という人物像があった。それは、和歌的世界からの物語の造型を意味していた。玉鬘巻が、末摘花の冒頭と似た書き出しをしているのは、並の巻、物語の構成、構造という問題にからんでいることは、古注の注記するごとくである。だが、やはり、和歌の世界と深く関わる物語的世界を描き、語ろうとした物語の主題に関わる一面があるように思われる。それは、旅の文学――貴種流離譚の話型をふまえる西国へのさすらいが、歌枕をぬって旅を続け物語が展開していく、そういう語られ方をする。（そのように）物語の伝承的世界を基層として、それを物語の背後に背負い続けているのである。そういう物語の骨組みが、「歌語」を物語の「ことば」

として、取り込んでくることになる。「ふる人」は、そういう「ことば」であったに違いない。

『万葉』に用いられている「古人」「老い人」の語例を、角川『新編　国歌大観』で拾っていくと、次のごとくである。

32　フルヒトニ　ワレアルラメヤ
高市古人感傷近江旧堵作歌。
577　ふるひとの　たまへしめたる
丹生女王贈太宰帥大伴卿歌二首。
1799　つままつのきは　ふるひとみけむ
挽歌　宇治若郎子宮所歌一首。

2587　わらはごとする　おいひとにして
正述心緒。
1038　いにしへゆ　ひとのいひける　おいひとの　をつといふみづぞ　なにおふたきのせ
美濃国多芸行宮大伴宿祢東人作歌一首。
4118　オイヒトモ　メヌワラハゴモ　シガネガヒ　ココロタラヒニ
賀陸奥国出金詔書歌一首并短歌。
3813　オイヒトヲ　オクリシクルマ　モチカヘリコネ
竹取翁歌。

『万葉』の歌には、「古人」三例、「老い人」四例の語例が見られるが、これらの歌語の用例や題詞から推測されることは、「老い人」が身分関係の上下には関係しないのに対して、「古人」は、そういう位相性を表わす語であったように見られることである。こういう身分関係の上下に関わる位相表現は、やはり、『源氏』のなかにも、かなり明確な形で残っている。「誰に」使われる語であったか、その一覧によって、源氏や薫が用いる語であったことからも、そうした位相性を表現する語であったことがわかる。「古人」の用語意識を形成する基層が、そうした言語位相に関わることは、歌語を物語の「ことば」として取り込み操る紫式部の方法に、やはり深く関わっていた、と見なければならない。

玉鬘の巻のはじめの本文、「資料(1)」に、岩波『新大系』を引用したが、その前後の部分を注意深く読み解いていく必要がある。『新大系』の小見出しは「源氏と右近の夕顔回想」、小学館『全集』のそれは、「源氏と右近亡き夕顔を追慕する」となっていて、同じ視点から捉えている。「あらましかばと、あはれにくちおし(を)くのみおぼし出づ。」と、源氏は夕顔を回想、追慕する。「その形見と見給(たまも)て、」『新大系』脚注「源氏にとって夕顔回想の種となっている。」『全集』頭注「夕顔のことを思い出す種。」現代語訳「あの人の形見とごらんになって」。諸注「見る」意に解するのは誤り。亡き夕顔の忘れ形見としてお世話なさって、の意。夕顔の死にあった右近は、行き所がなくなったので、源氏が邸に引き取った。『細流抄』の注記「むかへ取る」は、『広辞苑』には、「迎えて家に入れる。迎える。」として、若紫の巻の語例をあげる。小学館『日本国語大辞典』は、「①自分のもとに迎える。迎えて家に入れる。」として、宇津保、吹上・上、源氏・若紫の語例をあげる。『大辞典』の語意は、この語の持つ微妙な意味の揺れを捉えていると見ていいのではないか。ただ、引き取る、迎えるというだけではない、意味の揺れがあるように思われる。それは、この直前にある「心〳〵なる人のありさまどもを見給ひ重ぬるにつけても」、の「見給ひ重ぬる」と同じ意味である。『新大系』は「それぞれに気質の異なる女君たちのありようを（源氏が）次々とお知りになったにつけても」と脚注。この「知る」は、知識

として知るのではなく、男女関係の深い仲の経験を通しての意。『全集』が「それぞれに性格の違う人々の有様を数多くごらんになるにつけても、」という現代語訳するのは、やはり間が抜けている。男が女を「お世話をする」という、現代の人々からは、面白くない、いけない言い方が残っている、そういう意味である。右近自身は「何の人数ならねど」だが、夕顔は「この御殿移りの数のうち」に入るだろうにと、右近は思っている。「仕ふまつり馴れたり」、『全集』現代語訳。「昔から女房並みに長く源氏の君のおそばにお仕えしている」。だが、「古人」は、古参の女房という意味ではなかった。『全集』の現代語訳は「馴れ」が抜け落ちて、それとなく「親しい」感じを出している。苦心したのだろうか。間が抜けたのだろうか。だが、この語は、末摘花の冒頭に似て書き出されるこの巻のことばとして、かなり重要な「ことば」であり、「唐ころも」の歌から取り込んで来た「語」ではなかっただろうか。そのように、読み解いていかなければならない「ことば」だと思う。「資料(3)」の行幸の巻、『全集』に「方々より寄せられる祝儀　末摘花との贈答」とある物語で、源氏は末摘花を「あやしき古人」と呼んでいる。贈り物に添えた末摘花の歌、「わが身こそうらみられけれ唐ごろも君がたもをになれずと思へば」という歌にも、やはり、「なれ」の語が見え、業平の原歌以来「唐ころも」の歌は、「なれ」を重要な「語」として読み込んできた。やはり右近は、源氏にとって想い人であった過去を背負い続けて生きている女人であった。「らうたきもの」は、夕顔の死に近い部分・夕顔の巻に、「白き袷、薄色のなよゝかなるを重ねて、はなやかならぬ姿、いとらうたげに、あえかなる心ちして、そこと取り立ててすぐれたる事はなけれど、細やかにたを〳〵として、物うち言ひたるけはひ、あな心苦し、とたゞいとらうたく見ゆ。」（『新大系』117頁）とある。この部分、河内本、別本などは、青表紙本とはかなり顕著な本文の異同が見える。異文の存在は夕顔の人物像を造型しようとする解釈的異文の混入であったとも考えられる。しかし、「らうたし」は、源氏や紫の姫君の幼さに対して用いられてきた語でもあった。それが夕顔の死に近い部分に、重ねられて用いられていることに注意しなければならない。

夕顔は、「らうたき」女として造型されている。源氏の夕顔への追慕の情は、右近がその形代となっている。ただ、「形見」であったのではない。源氏が右近を愛する心は、「らうたき」ものとして、その形代としての意味を負うていた。須磨謫居の間、右近は紫上方の女房として仕えていた。紫の上は、「心よくかいひそめたる」女だと思っていたが、亡き夕顔の侍女として、やはり、対抗意識ともいうべきもの、侍女の誇りを心の奥底に秘め、持ち続けていた。この短い章段は、このように読んで来ると、「源氏と右近の夕顔回想」というようなものではなく、もっと、どろっと濁った男女関係のもつれ、相関図がなまなましくもつれ合っている世界がある。そればかりではない。「須磨へ御移ろひ」の背後には、藤壺と朧月夜とをめぐる愛の葛藤の世界が、二重、三重に、どろっと濁り込んでくる。「回想」とか、「追慕」とかいうような、浪漫的、抒情的な澄みきっただけの心情ではない。「それぞれの思い」なのである。六条院の愛の秩序が崩壊していく序曲が、遠くの方で聴こえてくるような、愛の葛藤の絵巻が、いかにも抒情的な静寂な世界のなかに装われている。

『新大系』356頁、「右近を御足まいりに召す。」「若き人は苦しとてむつかるめり。」とある本文の脚注に、「貴人の足をもんだりさすったりすること。右近が前に言いさした話題を、源氏が聞き出せるような場面が設定される。」「若い女房達は、(御足さすりは)疲れるといっていやがるようだ。」と注記する。『古典集成』は「「御足参り」で一語。」とする。角川『古典大辞典』には見出し語にこの語はない。小学館『国語大辞典』は見出し語にこの語があり、『新大系』の脚注と同じ語意。玉鬘の巻の語例をあげる。諸注異説はないが、召人のような存在の女人がすることだ、というような説があったような記憶がある。確認はできなかったが、誤りがなければ、私もその通りだと考える。この物語の場面の描写は、ただの関係にある年寄り達の会話だとは解し難い。「苦しとむつかる」のも「疲れるといっていやがる」のではなく、やはり、男女関係の親密さに対する照れ隠しがある。この場面、『紫式部日記』に描かれている道長と正室、紫式部の間がら、関係を連想させて、ほほ笑ましくもある。「戯れごと」のなかに「すき人源氏」の姿が、よく描かれ

ている。あまりにもあけっぴろげで、開放的で、開かれた場面なので、「ひめごと」として慎んできた古風な人々には、そういう面を読みにくかったのだと考える。この部分に用いられている「ふる人」右近の造型には、「侍女」右近とともに「召人」でもあった女人の姿が、夕顔の形代として、その主人公に対して、背負い続けてきた侍女の誇りが、やはり存在していたのだと思う。右近を「古参の女房」とだけしか読んで来なかった従来の「源氏読み」は、最も大切な物語の「核」を、欠落させてしまっていたのだと思う。

「弁の尼」には、「ふる人」六例、「老い人」十三例が、それぞれ用いられている。それらはそれぞれ、『源氏』全用例の50％（問題のある参考資料を含めると42.9％）46.4％を召めている。従来、それらの語例の位相性については、全く注意されることがなかったように思う。すくなくとも、管見に入った研究文献は存在しない。だが、この二つの「語」が『万葉』以来、「歌語」としての語史をもちながら、表現の位相を異にしている事実はやはり注意しなければならない。巻別に、二つの語例を一覧によって示すと、次のごとくである。「資料」番号は前表にかかげたもの頁数は『全集』の頁数で示す。

○橋姫

「老い人」　四例

(9)、136頁。薫出生の秘密を昔語りにほのめかす最初の場面。
(10)、142頁。その物語は具体的にはまだ語られない。
(11)、143頁。薫が左近将監を使者に弁に手紙を託す時の詞。
(12)、151頁。薫、弁に対面、柏木の遺書が手渡される物語の冒頭部分。

「ふる人」　二例

(6)、147頁。「薫帰京の後宇治と文通、匂宮に告げ語る」物語の末尾の部分。142頁に「老い人の物語、心にかかりて」とある。物語の表面的な場面という視点から捉えると、論理的には「老い人」の言い換えの語になっている。ところが薫は宇治の八宮の物語を匂宮に告げるが、姫君への想いは隠して語らない。匂宮は「いで、あなことごとし。例のおどろおどろしき聖詞見はててしがな」とからかう。それは、薫の秘められた心の内をついた詞であった。薫は「心の中には、かの古人のほのめかしし筋などの、いとどうちおどろかされてあはれなるに」とある。柏木と女三宮の恋の物語に深く関わりながら、同時に姫君の恋の物語に深く関わっていく弁の尼を表現する語として、やはり、この場面は「老い人」弁であってはならない。「ふる人」弁なのである。同一人物に対する呼称の揺れが、この二語の持つ語史、語意を、これほど明確に使い分けている語例はない。物語の、こういう用語意識の位相は、従来の『源氏』読み、「物語読み」のなかでは、あまり考えられて来なかった。だが、そうした読み方は、物語のもっとも大切な部分を読み落とし、欠落してしまったのだと考えなければならない。

(7)、155頁。「老い人」の「資料(12)」と同一物語で、「薫、弁に対面、柏木の遺書を手渡される」末尾に近い部分。物語は、「薫、柏木の遺書を読み、母宮を訪れる」物語へと続いていく。この同一場面の物語の中でも、「老い人」「ふる人」の二語が、やはり使い分けられている。物語の冒頭は、「さて、暁方の宮の御行ひしたまふほどに、かの老人召し出でてあひたまへり。」とある。これに対して、末尾近くの部分には、「つれなくて、これは隠いたまひつ。かやうの古人は、問わず語りにや、あやしきことの例に言ひ出づらむ、と苦しく

思せど、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもや、とまた思ひ乱れたまふ。」とある。冒頭の部分は、秘密を知る老い人「弁」でよく、末尾に近い部分は、秘密の恋、出生の秘密の物語に深く関わっていた弁の尼への薫の恥じらい、おそれの心情を大写しに、クローズアップしていくのは、やはり「ふる人」の語しかない。物語の作者は、同じような語意を表わす用語を重ねながら、しかも「ことば」を使い分け、呼称を通して異なる場面を構成している。その位相表現は、実に巧みであり、適切な用語意識に支えられている。

○椎本

「老い人」

(13)、170頁。「薫、八の宮から姫君たちの後見を託される」物語の冒頭。「宰相中将、その秋中納言になりたまひぬ。いとどにほひまさりたまふ。世の営みにそへても、思すこと多かり。いかなる事、といぶせく思ひわたりし年ごろよりも、心苦しうて過ぎたまひにけむいにしへざまの思ひやらるるに、罪軽くなりたまふばかり、行ひもせまほしくなむ。かの老人をばあはれなるものに思ひおきて、いちじるきさまならず、とかく紛らはしつつ、心寄せとぶらひたまふ。」とある。父柏木が死んだ当時の事を思うにつけても、父の罪障を軽めるため勤行をしたいと思う。弁の尼を、しみじみと深いえにしにつながる者と思い、目立たぬようにいたわって訪ねて行くというのである。罪障を軽めるべき勤行への思い、何か深いえにしを思う人、それが「ふる人」であってはならぬ。父の想い人としての過去を背負っている人であったかもしれない、という弁の尼への思いは、もはや、中納言薫の心情には存在しない。父柏木への汚れなき聖なる思いに沈む薫という人物

像に必要なものは、「老い人」弁の尼なのである。

(14)、190頁。「薫、弁と対面して、尽きぬ感慨に沈む」物語の冒頭。「ひきとどめなどすべきほどにもあらねば、飽かずあはれにおぼゆ。老人ぞ、こよなき御かはりに出で来て、昔今をかき集め、悲しき御物語ども聞こゆる。あり難くあさましき事どもをも見たる人なりければ、かうあやしく衰へたる人とも思し棄てられず、いとなつかしう語らひたまふ。」とある。八宮亡き後の宇治の邸、大君に代って、弁の尼が応対に出る。亡き父の喪に服する大君の勤行の姿。「資料(13)」の世界に深く関わる。遠い過去の想い人、恋の物語に関わる「ふる人」の語意とは全くかけ離れている弁の尼の姿がそこには見られる。「老い人」と呼ばれなければならない必然性が、やはり、そこにはある。

(15)、204頁。「薫、大君の迎え入れを申し出る　薫の威徳」の物語の末尾の部分。「あやしうはしたなきわざかな、と御覧ずれど、老人に紛らはしたまひつ。おほかたかやうに仕うまつるべく、仰せおきて出でたまひぬ。」とある。薫はお忍びであるのに、御庄の人々はそうはいかない。弁の尼への所用と取りつくろって、人々にお邸への奉仕を指示する。この場面の弁も「ふる人」ではない。八宮亡き後のお邸に仕える主要な老い女房である。

「ふる人」

(8)、174頁。「薫、姫君たちと語り内省す　匂宮の懸想。」の物語。すでに本文を引いて述べたが、物語冒頭の部分。薫出生の秘められた物語を、の意であるが、引用本文に続いて「世の常の懸想びてはあらず、心深う

物語のどやかに聞こえつつものしたまへば、さるべき御答へなど聞こえたまふ。」とある。弁との物語はそれとなく終って、世の常の懸想びた物語ではないが、入り方の月隈なくさし入りたるなかで、忍ぶる恋の想いを秘めて、薫の姫君たちとの物語が展開していく。弁は、やはり、「老い人」ではなく「ふる人」と呼称されなければならない場面を構成する。

(9)、188頁。「薫、宇治を訪問し、大君と歌を詠み交す。」物語の冒頭部分。すでに本文を引いて述べた。薫出生の秘密を知る弁を、の意ではあるが、弁が柏木の思い人として女三宮との恋に深く関わったかと推測され、さらに宇治八宮の姫君達との恋物語に関わっていく。物語構成上の立場を描いているのが「ふる人」弁である。

(10)、192頁。「薫、弁と対面して、尽きぬ感慨に沈む。」物語のなか程の部分。すでに本文を引いて述べたように、「薫出生の秘められた物語を知悉している弁」の意であるが、その事を姫君達に知られることを恐れ、恥じる薫の心情がからみあい、薫の恋物語に深く関わってもいく弁の姿が描かれる。やはり「ふる人」であり「老い人」ではない弁が造型されている。

○総角

「老い人」

(16)、221頁。「薫、弁を呼び、姫君たちのことを話しあう」物語の末尾の部分【全集】頭注に「大君との直接の話では埒があかぬとみて、薫は弁を味方に引き入れて事を進めるつもりである。薫の言葉によれば両者矛

盾すべき道心と恋心が一貫性あるものとして論理化される。それだけに大君への思いは世の懸想心とは異質の誠実なものということになる。一方、弁の応答は、薫と大君とそれぞれの心を汲み、情理を尽くし、聡明、慎重な人柄を印象づける。しかし、それも年の功ゆえの駆引きであろうか。後の弁の変わりざまに注意。」(222頁)とある。物語は、「薫、大君のもとに押し入り事なく朝を迎う」物語へと続く。弁が手引をしたのではない。墨染めに、「やつれ」た大君のもとに、薫は押し入ったのだった。人々が二人の契りを想像したのとは違って、情事はなく、朝を迎える。弁は「ふる人」ではなかった。二人の心情を組み、情理を尽くし、聡明・慎重な人柄として、事に対処したとは、物語は書いていない。「老人、はた、かばかり心細きに、あらまほしげなる御ありさまを、いと切に、さもあらせたてまつらばや、と思へど、いづ方も恥づかしげなる御ありさまどもなれば、思ひのままにはえ聞こえず。」とある。『全集』頭注は、「薫も大君も心深きさまなる故に、」という『岷江入楚』の注記を引く。現代語訳に「どちらのお方も気がひけるほどごりっぱなお相手でいらっしゃるので」とある。弁は、八宮亡き後の大君の寂しい、不如意でもある大君の身の上を思い、二人の仲を、と思う。しかし「いづ方も恥づかしげなる御ありさまども」なので、ためらっている。「ふる人」にはなれないでいるという。「はづかしげなる」は、「こちらが気おくれを感じるほど立派なさま。奥床しく見えるさま。」(小学館『国語大辞典』)ご立派さ、奥床しさに、弁は気おくれしてしまって、手引きすることもできない。「老い人」としてためらっている、というのである。弁は「老い人」として戯画化され、薫もまた、道心と恋心に迷う「をこ」なる男として戯画化されていく。「老い人」弁なのである。

(17)、237頁。「喪明け、薫宇治を訪問、女房手引きの用意」とある物語なか程。「客人は、かく顕証にこれかれにも口入れさせず、忍びやかに、いつありけむ事ともなくもてなしてこそ、と思ひそめたまひけることなれ

ば、「御心ゆるしたまはずは、いつもいつもかくて過ぐさむ」と思しのたまふを、この老人の、おのがじし語らひて、顕証にささめき、さは言へど、深からぬけに、老いひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる。」と本文にある。「弁の尼」は、総角の巻では「ふる人」と呼称されるのは、以下述べるように、一回だけである。「老い人」弁である。柏木と女三宮の恋の秘密、おそらく乳母子として柏木の思い人としての一時をもったであろう。そういう過去を背負いながら、薫と姫君とを手引きしようと傾斜していく生き方のなかで、弁はやはり、「老い人」という存在に化していく。そこには、既に過去を背負いながら、思い人として生きる姿は捨象されている。「老いひがめる」「古人ども」であり、「老い人」であり、「老い人ども」でもあった。それに、注意しなければならないのは「顕証」の語が重複して用いられていることである。この語については、『源氏物語「本文と享受」の方法』（和泉書院）のなかで、別に論述した。薫は大君との仲を目立たぬように、人目をはばかっているのに、弁などの侍女達は、それとは逆の心情でいる。「薫の心情と侍女達の心情との相対する違いを「顕証に」の語によってきわ立たせ、戯画化していく作者の用語意識が、実に見事に浮彫りにされている。やはり、したたかに操られた用語であることを読んでいく必要がある。」（196頁）と述べた。同じ語を重複させ、心情の対立、相違を、戯画化し、アイロニカルに見事に描いている。薫の配慮、思いやりとは無関係に、老い人達によって事が計られ、進められていくことが、「いとほしくぞ見ゆ」というのだ。(18)、248頁。「薫、大君と片枝の紅葉につけて歌を交す」物語の後半部分。本文に、「いよいよはじめの思ひかなひがたくやあらん。とかく言ひ伝へなどすめる老人の思はむところも軽軽しく、とにかくに心を染めけむだに悔しく、かばかりの世の中を思ひ棄てむの心に、みづからもかなはざりけり　と、人わろく思ひ知らるるを、」とある。薫の出家への思いは、語られてはいないが、弁に対する思わくがからんでいる。きわめて

俗っぽい、通俗的な心情でもある。弁の尼は、「老い人」と呼称するより他に、言いようがない。

(19)、260頁の「老人」は「匂宮の後朝の文　大君中の君に返事させる」物語の末尾の部分。本文に、「ことごとしき御使にもあらず、例奉れたまふ上童なり。ことさらに、人にけしき漏らさじと思しければ、昨夜のさかしがりし老人のしわざなりけりと、ものしくなむ聞こしめしける。」とある。匂宮の一般的な推測とも、弁とも解し得るが、特定するには確証を欠く点もあろうかと思われるので、「参考資料」として、「弁」に対する呼称の資料からは、ひとまず除外する。

(20)、264頁。「三日夜婚儀の用意　薫来たらず贈物あり」とある物語の前半部。本文に、「御衣櫃あまた懸籠入れて、老人のもとに、「人々の料に」とて贈へり。」とある。弁は、もはや、柏木、女三宮の秘められた悲恋の物語、乳母子として、柏木の思い人であったかも知れない過去を背負う老い女房ではない。薫の指示を忠実に守り、かいがいしく働く「老い人」である。

(21)、305頁。「薫　重体の大君を看護する　大君薫を拒まず」とある物語の冒頭。本文に「修法は、おこたりはてたまふまで、とのたまひおきけるを、よろしくなりにけりとて、阿闍梨をも帰したまひければ、いと人少なにて、例の、老人出で来て御ありさま聞こゆ。」とある。薫の指示を守り、かいがいしく大君の臨終を看取る、「老い人」弁の姿が描かれている。「資料(20)」と全く同じ、相似する場面が、同語「老い人」の呼称によって構成されている。

「ふる人」

(11)、217頁。「薫、弁を呼び、姫君たちのことを話しあう」物語の冒頭。既に本文を引いて述べたように、「薫出生の秘められた物語を、」の意である。弁は、柏木の乳母子として、やはり柏木の思い人としての過去を持っていたのかも知れない。だが、そういうある程度の思慮分別のつく「老い人」として、八宮邸に住んで、姫君達の将来に深く関わる採配をふるい得る侍女でもあった。そういう二重、三重の役割を演じる弁は、やはり「古人」と呼称されなければならない人であった。弁は以後「古人」と呼ばれず、「老い人」として、後の役割を演じる人になる。

○宿木

「老い人」

(22)、442頁。「薫、宇治を訪れて弁の尼に対面する」物語のなか程。本文に、「「いとかしこけれど、ましていと恐ろしげにはべれば、つつましくてなむ」と、まほには出で来ず。「いかにながめたまふらん、と思ひやるに、同じ心なる人もなき物語も聞こえんとてなん。はかなくもつもる年月かな」とて、涙をひと目浮けておはするに、老人はいとどさらにせきあへず。「人の上にて、あいなくものを思すめりしころの空ぞかし、と思ひたまへ出づるに」とある。「弁」は、以後「老い人」と呼称されることもなくなる。

「老い人」といわれる人達は、また別の物語を構成していく人々である。宇治八宮の死、大君が、匂の訪れ

が途絶えがちなのを苦悩していたこと、大君への思い、そうした物語を薫とともに共有しているのは、弁以外にはいない。薫にとって、「老い人」弁は、その心の奥深くを理解し得る唯一の存在であった。それは「老い人」としか言いようがない「弁」である。

このように一覧してくると、「弁の尼」を、「老い人」、「ふる人」と呼称して、それを使い分けて来たことは明確であり、語意の重なりを超えた歌語に対する用語意識が深く関わっていたと考えなければならない。このことは、「右近」、「弁」が「ふる人」と呼ばれる表現の位相が、物語作者の用語意識に操られた、したたかな用語、表現であったことを示している。そして、それが「歌語」を操る歌人、物語作者としての高い自意識に根ざすものだあったことを読み解いていかなければならない。『万葉』以来の「歌語」の語史、『古今』『古今和歌六帖』さらに『公任集』における用語をもふまえて、「ものよみ」として、和泉式部の和歌の世界を冷やかに、批判し、見つめる物語作者の誇り、おごりともいうべきものが見られる。玉鬘の巻が、その冒頭を末摘花の巻に似せ、和歌的な韻律美のなかに語り出そうとしたのは、巻末の歌論とともに、この巻が、和歌の世界と深く関わる物語世界の新しい造型であったことを示している。和泉式部に対する物語作者の情念をめぐっては、既に別に論述した。

## 三、結語

岩波『新大系』脚注に「瀬戸内の、興趣深い風景をさす。」とある。従来、玉鬘の巻の「おもしろき所〴〵」には、こういう類の注がつけられてきた。ただ、新典社『影印校注古典叢書』（小山利彦校注）だけは「道すがらの海上のさ

まなり（岷江入楚）歌枕と呼ばれる名所など。」と注記する。この前後の本文や巻の冒頭、末尾の部分をどう読むかは、疏注の領域にとどまらずに、「源氏読み」として、かなり重要な意味、問題をもつもののように思われる。従来、これらの点については、あまり検討されてこなかった。若紫の巻の「にしのくにのおもしろき浦うら」などの用例に対応する歌枕の用語意識との関わりのなかで読んでいくと、今まで読み解かれてこなかった種々の問題点がクローズアップされてくる。

既に『首書源氏物語　玉鬘』（影印本　和泉書院）の補注で指摘したことであるが、和歌の唱和へと展開し、旅の文学として「かねのみ崎」以下、歌枕をめぐって進められていく、玉鬘下向の物語を、瀬戸内の単なる自然の景色を眺めての叙述と考えることは、やはり、誤りであると思われる。『伊勢』八十二段「渚の院」の物語に「その院の桜、ことにおもしろし」とある。桜の名所であり、歌枕でもあった。紀貫之は土佐の国守の任果てて上洛の折、この渚の院を通る。『土佐日記』は、「その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり」と書いている。業平の「世の中に絶えて桜の」の歌を思い出し、「今、今日ある人、所に似たる歌詠めり」ということになる。歌枕をめぐり、それをぬって旅をし、そこで歌を詠み、唱和する。『記紀』『万葉』以来、歌が作られ謡い詠まれ、旅が続けられる、歌枕をめぐるある「感傷」が、やはり、そこには描かれている。渚の院の桜が「ことにおもしろし」そして、そこは「おもしろかりける所」であった。歌枕を、古歌をふまえ、その物語を通して眺めようとする。『源氏』若紫の「後方」の山に立ち出でて眺望し、人々が西国の「おもしろき浦々」の物語を語るのは『土佐』の「後方の丘」という語に、その世界と重なるある一つの幻影、幻想のようなものさえ感じさせるものがある。『土佐』は、「後方の岡」に「松」があり、「中の庭」には「梅の花」が咲いていたとする。「梅の花」から「桜」の歌への連想の基層には、貫之の「人はいさ心も知らず」の歌が介在しているようにも思われるが、「梅の花」から「桜」への展開には、貫之が「桜」の花の歌人として、その

特殊な地位を確立していったかにみえる『古今和歌六帖』時代の貫之の歌人像を既に象徴するものではなかったかと憶測させるものがある。『古今和歌六帖』の「さくら」の歌は四十六首、うち貫之の歌は十六首で、34.8%にも達する。『貫之集』796番歌「桜には心のみこそ苦しけれあきて暮らせる時しなければ」の歌は、『古今和歌六帖』四一八五番歌にも見える歌である。ところが、『興風集』の「見てかへる心あかねば桜花咲けるあたりは宿やからまし」の歌に対する返歌であったとすれば、貫之と興風との和歌の贈答は『伊勢』八十二段後半の物語を意識し、それを下に敷いての贈答であった。『貫之集』と興風の歌との関係を指摘された木村正中氏の説は正鵠を射たものである。それが、『伊勢』の享受による贈答歌であったことは動かし難い。『土佐』の供述と『貫之集』の歌との贈答歌に見られるこの事実は、貫之の『伊勢』享受に、ある歴史的現実の方法ともいうべき物語享受の方法ともいうべきものがとられていたことを示すものだと思う。そして『土佐』を貫く批判の精神が、『伊勢』の反藤氏、みやびの精神と奥深く、その底でつながっている世界を見なければならないと考える。このように紫式部の『伊勢』『土佐』『貫之集』に貫流する歌論、その物語享受の方法は実に見事である。巧みであるとしかいいようがないしたたかさがある。「旅の文学」日本文学の本質へと迫る歌論の構築と展開の位相を玉鬘の巻に読み説いていくことが必要である。

「ふる人」も「右近」が源氏に仕える古参の女房という意味ではない。『古今』731番歌、「ふるひとなれば」の歌は、『古今和歌六帖』『奥儀抄』『和歌色葉』などに引かれるが、それらの歌意、配列などを考え、『公任集』392番歌などの用例をたどっていくと、やはりそこには『細流抄』が既に指摘していたように解される源氏の想い人「右近」像が浮びあがってくる。物語の作者は、驚くべき文学史家であり、漢才をも大きくとり込んだ歌学の豊かな学識、教養に裏うちされた「歌語」をかなり自由に操り得る人であった。それらの用語意識をめぐって、その意味を考えてみたい。

「ふる人」の『源氏』全用例は、テキスト、本文解釈、「索引」の扱いなどによって、若干語例に出入があるが、本

文と「索引」の扱い方、解釈に問題の存する明石の巻、初音の巻の用例を「参考資料」とする。また、若菜上の巻、「わらはにて京よりくだりけるふる人」とある本文には問題があるので除外すると、一覧に示したごとく十二例である。若菜下巻で、女三宮に対して、源氏自身が自らを「ふる人」と呼称するのと対応、照応する用例である。そこには、それぞれの女人達に、「古馴染」の男として自らを表現しようとする逆説的でアイロニカルな響きがある。それは、源氏や薫の自虐的な心さえうかがわせるような表現となっている。物語の作者は、この照応する対偶的表現のなかに、実に見事に登場人物の対応する心情の世界、人間像を造型し、そして、結晶している。したたかな用語意識によって操られた「ことば」であったと見なければならない。

行幸の巻で、源氏が末摘花を「ふる人」と呼称するのは、「古馴染」の女人に対するてれ隠しであり、源氏に対する物語作者の戯画化の意識が表現されてもいる。源氏が如何に弁解し、けなし「をこ」者に扱っても、末摘花が源氏を大切な男、夫と思っていることは、消去しようもない事実だというアイロニーが、そこには存在する。「参考資料」にあげた初音の巻の明石の御方が、自分自身のことを「ふる人」と呼称するのは、やはり、自分が源氏の古馴染の女であることを前提とする表現であったという視点に関わっている。また、やはり「参考資料」としてあげた明石の巻の、明石入道に対する物語作者の「ふる人」の呼称も、入道が、源氏と明石の御方との仲を取り持つ風流人であったことに深く関わる用語意識が存在していたと見られる。ただ、本文に問題があって、明石の尼君、明石の御方の用例から、享受の過程で、可及的に後から挿入されたとの見方もできようか。そういう改変が、また、可能の状況でもあった。明石の尼君は、そうした風流人、好き人入道の積極的なはたらきかけに、はじめは批判的であり、消極的であったと書かれている。しかし、明石一族の浮沈をかけた一門の家の物語にからんでくると、その立場は違ってくる。神仏の導きに深く関

わりながら「幸い人」への道に加担し、それを支える人になる。そして、若菜上巻で、自らを「ふる人」と呼称する。そこには、諸注が指摘するごとく、『伊勢』に依拠した人物造型が見られる。「翁」「姥」の物語を反権力的、反権勢的物語として語る「貴種流離譚」を基層とする物語の「話型」が、その背後に隠されているように思われる。折口信雄氏が指摘された明石「一門」の物語の意味は、また、新たに問い直されなければならない問題である。また、反権力、反権勢、反藤氏の「物語」は、「恋」をその基層に揺曳する「文学」でもあった。

「右近」は古参の女房という解釈で、従来あまり問題にはならなかった。しかし、夕顔の忘れ形見、形代的な存在として、ただ、侍女としての役割りを負ってきた女人ではなかった。その諸相を、やはり物語の叙述のなかから読み解いていかなければならない。源氏の想い人、古馴染の女人としての存在を示す語が「ふる人」であったことを考え、読み解いてきた。玉鬘の巻は、やはり、そういう読み方をしてかなければならないように思う。

「弁の尼」は「古人」として登場し「老い人」に転じていく。「物語をひらくもの」としての「老い人」という視座も、確かに必要であり、それはそれなりの意味を持っている。しかし、柏木の乳母子として、柏木の想い人としての存在という宿命を負い続けていたかとも思われ、女三宮との秘められた恋物語に深く関わり、遺言を託された弁が、そういう物語に関わる世界では「ふる人」であり、宇治の姫君の恋の手引きという、現実の恋物語に深く関わっていく物語的世界の中では「老い人」と呼称されるようになる。物語の位相に関わりながら、「ふる人」、「老い人」と呼称を転じていく弁の尼の姿は、やはり注意深く読み解いていく必要がある。

岩波『広辞苑第四版』は、「ふる人」の語意を示す語例に「古人ども」をあげているが、それは誤りであると思う。『源氏』でも、「古人ども」「老い人」「老い人ども」は、手習の巻の横川の僧都の母に対する「老い人」の呼称を除くと、すべての用例は、女房、侍女達に対して用いられる語例となっている。「ふる人」「老い人」は『万葉』以来の歌語でも

あったが、『万葉』でも、比較的な言い方として、いささかでも身分のある者に対しては「古人」が、「老い人」は身分とは関係なく歌語として用いられている。僅か数例の語例に過ぎないが、そういう『万葉』の用例は、『源氏』でも、同じであった。この語史的な事実は、もっと大切に、注意深く見ていく必要があるように思われる。

歌語としての「ふる人」の語例は「八代集」を通じて『古今』の一例だけであることも、やはり注意すべきことであるが、この点についても、管見に入った論攷はなかった。しかし、『古今』第十四、恋歌四、731番歌「かげろふのそれかあらぬか春雨のふるひとなれば袖ぞ濡れぬる」の歌は、『古今和歌六帖』「かげろふ」の821番歌に重出する。さらに『奥儀抄』536番歌には「それかあらぬと」「袖ぞひぢぬる」となって重出、『和歌色葉』269番歌には、第五句が『奥儀抄』と同じで重出する。「ふる人」「かげろふ」の歌として、この歌が『古今』以来尊重され、重視されてきたことの事実を知ることができるし、また、注意する必要がある。『源氏』の作者はこの歌を通して、「歌語」として、この語を物語の中にとり込み、操って来たのではないか、という推定が、かなり高い可能性、蓋然性を持つものとして考えられる。この歌が、一貫して「恋」の歌でもあったことが重要なのである。物語の作者は、「ふる人」の語のなかに、この歌の世界を借景として、負い続けていた、そういう歌人的意識、誇りのようなものが、情念となって燃え続けていたように思われる。

そればかりではない。この語は『藤原公任集』の中でも用いられている歌語であった。角川『新編国歌大観　第三巻』三九二番歌、「雨ならではかなき空にふる人も露にもぬるる物とこそきけ」は、「御ともの人の雨降りぬべしときこえければ」　「秋の夜の雨にもなにかいそぐべき此比ふると思ひなしつつ」とある三九一番歌の「かへし」の歌で、ある女房の詠んだ歌である。ところが『新後拾遺集』の詞書きによれば、この女房は和泉式部である。『和泉式部集』『風雅集』との関わりからも、一品の宮に仕えていた和泉式部は、公任と歌を交わしていて、二人の間にはやはり交渉があったと

見なければならない。これらの勅撰集は中世以降の成立に成るもので、その詞書をそのまま信じてよいかには、疑問がないわけではない。だが、足利幕府の時代には、少なくとも、そういう読み方がされていた、ということだけは事実である。それを事実であったと仮定し、前提にすれば、紫式部にとって、それはかなり胸にこたえる刺戟的なことがらであったに違いない。そして、それが、あるいは和泉式部でなかったとしても、その贈答歌については知悉していたと考えられ、「ふる人」の歌語に対する意識のなかに、あるとぎすまされた情念が燃えさかっていた、と見る方が自然のように思われる。公任は、父為時と兄為頼と非常に親しい間がらであったという視点に、数歩譲って考えてみても、やはり「ふる人」の贈答歌については知悉していたに違いない。このように考えてくると、『源氏』の作者は『古今』、『公任集』との歌語の用例を意識しながら、それを物語の中に取り込み、したたかに、巧みに物語の「語」として操っていったと考えなければならない。そして、その意識の根底、基層には、それらの「歌語」に対する語史、「ことば」の原意と歴史に対する学識、歌学に対する深い理解、歌人としての誇りが、愁いかがやいていたと考えなければならないと思う。

『枕』の「草の庵を誰かたづねむ」という、清少納言の応答は、『白氏文集』の語句をふまえた見事な返答で「草の庵」と呼ばれるようになったことを語る「吹き語り」である。紫式部が『源氏』のほまれから「日本紀の局」と呼ばれるようになったことと、対照的、照応するものであることの意味、さらに『源氏』と『史記』との関わりの問題については、既に別に論述した。しかし、紅葉賀の巻に「から人の袖ふることは遠けれど立ちゐにつけてあはれとは見き　おほかたには」（『全集』(1)385頁）とある藤壺の「ことば」は、「かやうの方さへたどたどしからず、他の朝廷まで思ほしやれる、御后言葉のかねても」と評されている。それは、どうしてか。『全集』は「歌中のことばづかいから」「后言葉」が既に見られると解する。具体的には何なのか、解し難いが、『万葉』額田王の「野守は見ずや君が袖ふる」の歌を、

「ことば」の奥に隠し、漢字をもふまえた「大和魂」と「漢才」とを自在に、奔放に駆使した、「心」の奥底を、当事者以外には絶対に伺い知ることのできない、秘められた「心」の内奥を絶対にのぞき得ない「おおやけごと」として取りなす、ゆるぎない、おおらかな「ことば」だと解すべきであろう。「大和魂」と「漢才」とを兼ね備えた深い学識こそ「后言葉」「后教育」であったように考えられる。葵巻で、葵の上が『白氏文集』の詩句をすさび書きしていたことが見える。その心情を託した詩句に、源氏が和歌を書き添える。それは、挽歌的物語の世界であるが、そこには、后教育を受けてきた葵の上の、悲しい終着の世界を偲ばせるものがある。物語の作者は、そのように育てられてきた葵の上が、源氏と結ばれていった宿業の世界を描いている。『古今』以来、特に顕著になった漢詩文と和歌との享受の深い関わりと、『和漢朗詠集』に一つの結実を見せた文学的風土の結晶していく姿を示すものでもあった。だが、それは、そのことだけにとどまるものではない。そこには、「草の庵」の世界を、はるかに見くだしている『紫式部日記』の清少納言評があり、和泉式部と公任との交渉に、ただならぬ情念の火群を燃やしていた物語作者がいたのかも知れない。そこには、「草の庵」を超克し、『和漢朗詠集』に一矢を放つ、どろっとした、あるいはかえって、すかっとしたような、いわば『女人和漢朗詠集』ともいうべきものの作者――物語作者像が、造型されていたのである。

## 付記

本稿は、平成七年十月十四日、長野市で開催された中古文学会で「「玉鬘」の巻用語考――「おもしろき所〻」・「ふる人」疏注――」と題して研究発表した論文をもとに執筆した。ご指導を忝ういたしたことに深謝する。文献については、西譲二先生、浜美和子氏のお世話になった。また、原稿の整理、校正については、「茅野源氏の会」の岩波乃

里栄さん、「伊那源氏の会」の花岡美智子さんのお世話になった。ともに、厚く御礼申しあげて付記とする。